中国の文化Ⅲ

日中文化交流史

第十一回　李香蘭が見た戦時下の中国と日本

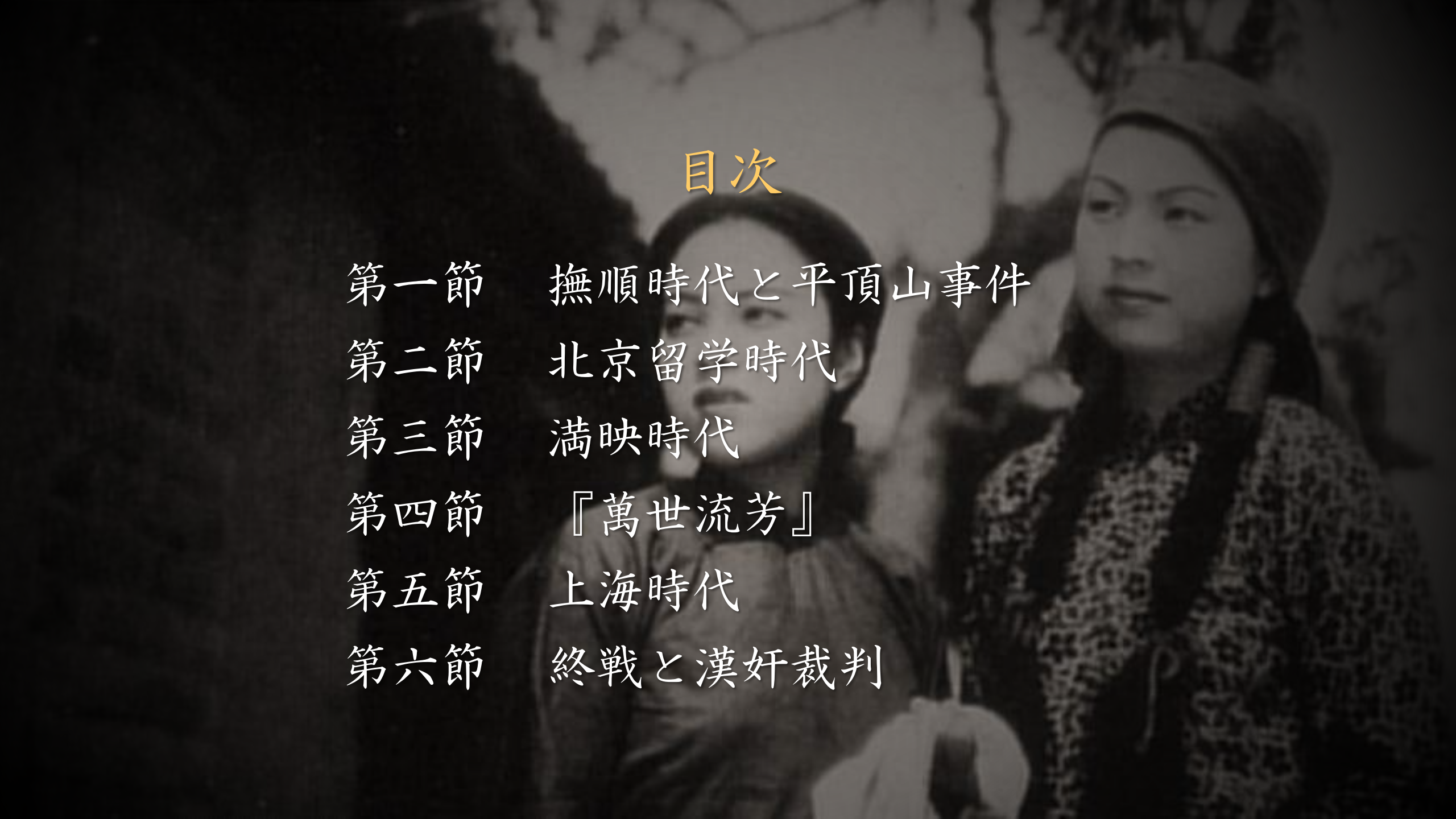
一九三一年、日本軍現地部隊の謀略による満鉄爆破事件（柳条湖事件）を発端として、日中両国は十四年あまりにおよぶ戦争へと突入する。

そうした中、旧満州（中国東北部）に生まれ、銀幕とステージを通じて、日中両国民から愛されたスターがいた。山口淑子、芸名・李香蘭である。

今回の講義では、彼女の眼を通して見た戦時下の日中関係について考えてみたい。

VIDEO

ドラマ李香蘭(テレビ東京・角川映画 2007年)より



目次

第一節　撫順時代と平頂山事件

第二節　北京留学時代

第三節　満映時代

第四節　『萬世流芳』

第五節　上海時代

第六節　終戦と漢奸裁判

第一節　撫順時代

父・山口文雄と母・アイ

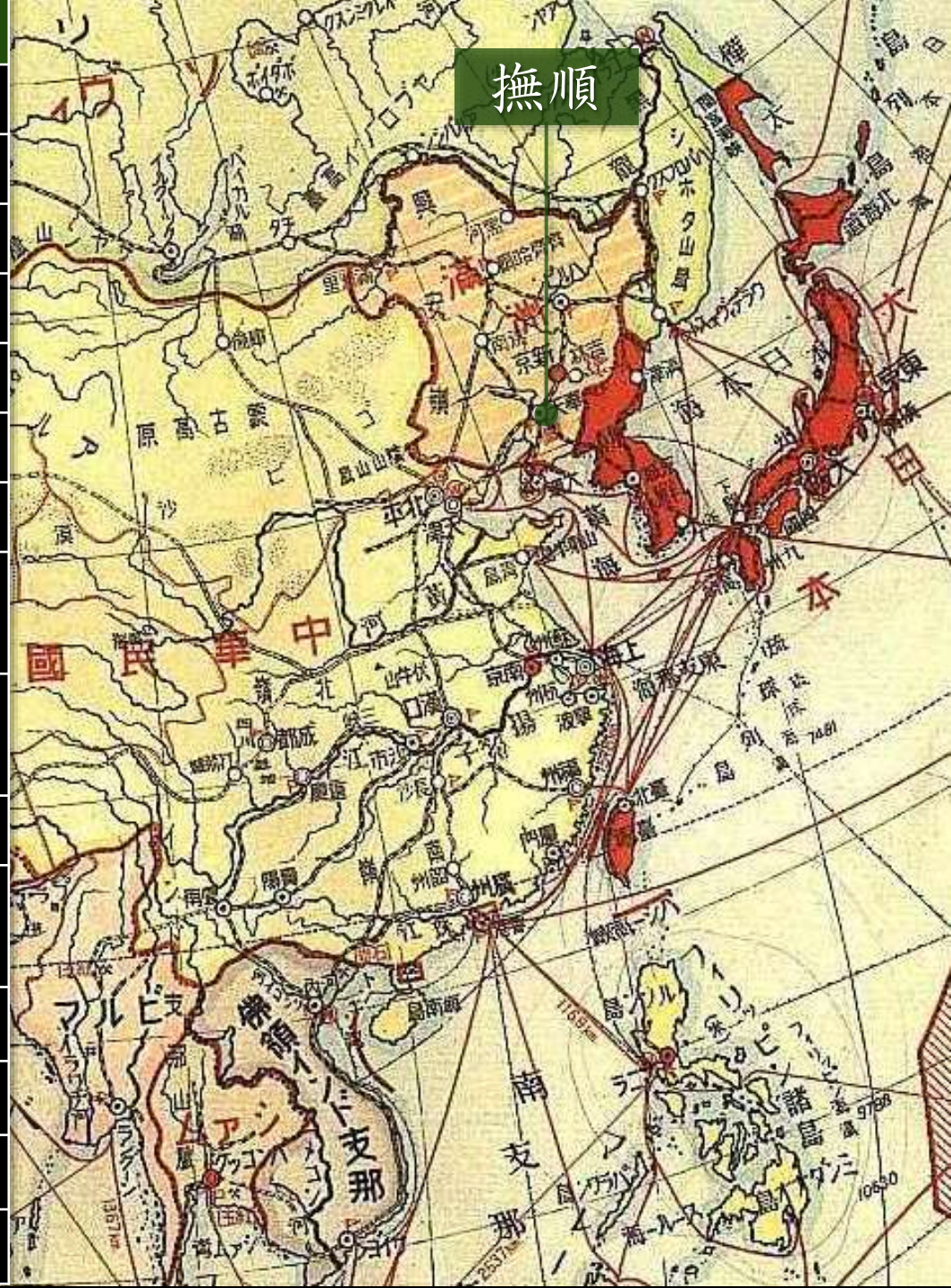
幼年時代の李香蘭

〔解説〕

李香蘭、本名山口淑子は一九二〇年、中国東北部の撫順に生まれた。父・山口文雄は南満州鉄道株式会社の社員で中国語の講師をしていた。

淑子はこの父の指導を受け、幼い頃から中国語を学んでいた。

西暦	年齢	李香蘭(山口淑子)略年譜
1920年	0歲	旧満州(中国東北部)の撫順に生まれる



山口淑子『李香蘭〜私の半生』

「幼稚園時代、父はひまがあれば私を机の前にすわらせ、一対一で中国語の発音を教えてくれたが、小学校にあがると、自分が講師をしていた満鉄研修所の中国語夜間講座に出席させた。私は教室の最後列にすわらせられ、大人たちにまじり一人前の生徒としてあつかわれた。」

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
（新潮社一九八七年、二六頁）

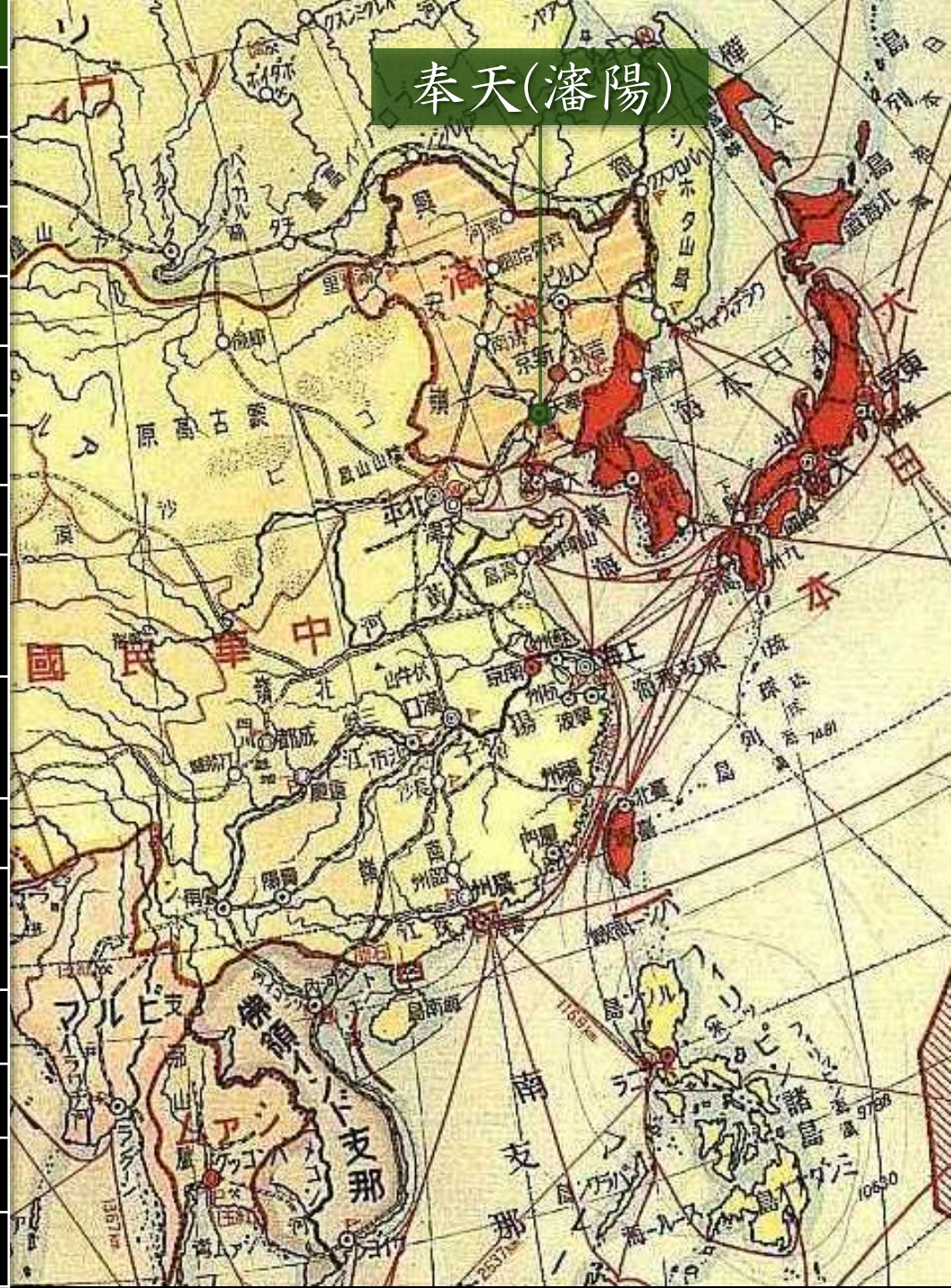
柳条湖事件と平頂山事件

〔解説〕

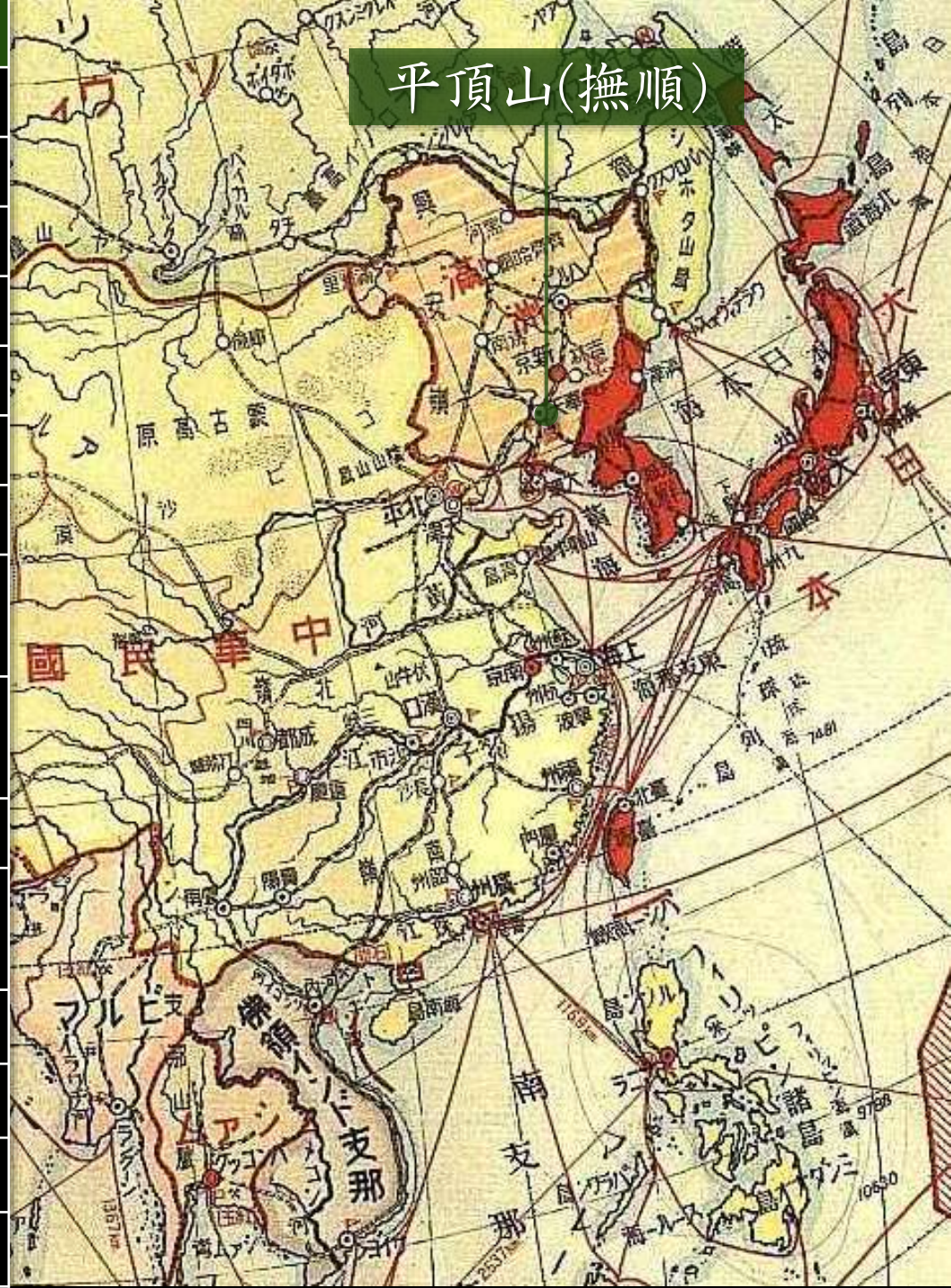
一九三一年、山口淑子が十一歳の時、日本軍の現地部隊が南満州鉄道鉄道を爆破し、これを中国軍の破壊活動として満州全土を占領するという事件が起った(柳条湖事件)。

翌三二年、日本が清朝の廃帝・溥儀を執政として満州国の建国を宣言すると、抗日ゲリラが撫順炭鉱を襲撃した。これに対し、日本軍は報復として近隣部落の住民を大量虐殺した(平頂山事件)。

西暦	年齢	李香蘭(山口淑子)略年譜
1920年	0歳	旧満州(中国東北部)の撫順に生まれる
1931年	11歳	柳条湖事件（九・一八事件）



西暦	年齢	李香蘭(山口淑子)略年譜
1920年	0歳	旧満州(中国東北部)の撫順に生まれる
1931年	11歳	柳条湖事件（九・一八事件）
1932年	12歳	平頂山事件



NHK BSプレミアム 世界・わが心の旅「李香蘭～遥かなる旅路」より

李香蘭が目撃した殺害

「(家の)窓を開けると周囲がにわかに騒々しくなり、おおぜいの男たちが声高に話しながら入ってきた。一行は憲兵と私服の日本人だった。その先頭に眼かくしをされ、うしろ手に縛りあげられた中年の中国人が、縄尻をとった憲兵にこづかれ、ヨロヨロと歩いていた。中国人はその服装から苦力頭の感じだった」

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
(新潮社一九八七年、三〇頁)

李香蘭が目撃した殺害

「一行は苦力頭を広場の真中にある大きな松の木に縛りつけ、眼かくしをとった。中国人の顔は私のほうをむいている。私は、窓からおそるおそる異様な光景を見守っていたのだが、その縛られた人の眼が私を見ているような気がしてならなかった。周囲に中国人、日本人がどんどんふえてきた」

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
（新潮社一九八七年、三〇頁）

李香蘭が目撃した殺害

「やがて鉄砲を持った憲兵が、大声で何かを問いただしはじめた。どなっているのはわかるが、その内容ははっきりしない。苦力頭は唇をかみしめて土気色の顔をそむけたまま、一言も答えようとしない。憲兵は、さらに大きな声でひとしきりわめいたが、やはり口を開かない。憲兵の声はますます荒くなる。が、視線をそらしたまま、返事をしない。」

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
（新潮社一九八七年、三〇頁）

李香蘭が目撃した殺害

「アッというまもなかった。憲兵は手にした鉄砲を逆さに持ちかえると、その台尻で中国人の額を力まかせに殴っていた。

私が思わず眼をつむったときには、もう殴り終わっていて、鉄砲が空間に描く大きな弧の残像だけが瞼に焼きついていた。つぎの瞬間、うなだれた姿勢の男の額からおびただしい血が胸をつたって流れた……」

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
（新潮社一九八七年、三〇頁）

撫順炭鉱

平頂山事件（一九三二年九月）

〔解説〕

平頂山事件の経緯については、撫順炭鉱の日本人元職員が、戦後次のように証言している。

撫順炭鉱日本人元職員の証言

「（撫順）守備隊は……撫順炭鉱内部にスパイがいて匪賊に警備状況を通報していた、と断定して、匪賊襲来の足だまりとなった平頂山部落住民が最も怪しいと睨んだ。（中略）同部落を捜査したところ、前夜の襲撃現場からの盗品が発見されたので……同部落住民が匪賊と行動をともにした、との結論を得た。」

満鉄東京撫順会編『撫順炭鉱終戦の記』（一九七三年）

撫順炭鉱日本人元職員の証言

「（そこで）老若男女を問わず住民全員を崖下に横隊に並べると……機銃掃射により皆殺しにしてしまった。

当時私ども日本人社員も、困ったことをしてくれたものだ、と密かにこぼしながら、防衛隊員の手で死体に重油をかけて火葬にし、崖の上に火薬を仕掛けて土砂を崩し、これを葬った。」

満鉄東京撫順会編『撫順炭鉱終戦の記』（一九七三年）

平頂山惨案遺址紀念館

〔解説〕

一九七一年に事件現場の発掘が行われ、女性や幼児を含む約八〇〇体の遺骨が発見された。

その現場は、遺骨とともに平頂山惨案遺址紀念館として保存されている。

平頂山惨案遺址紀念館内に保存された事件の発掘現場

赤ん坊の遺骨

平頂山事件の記念碑

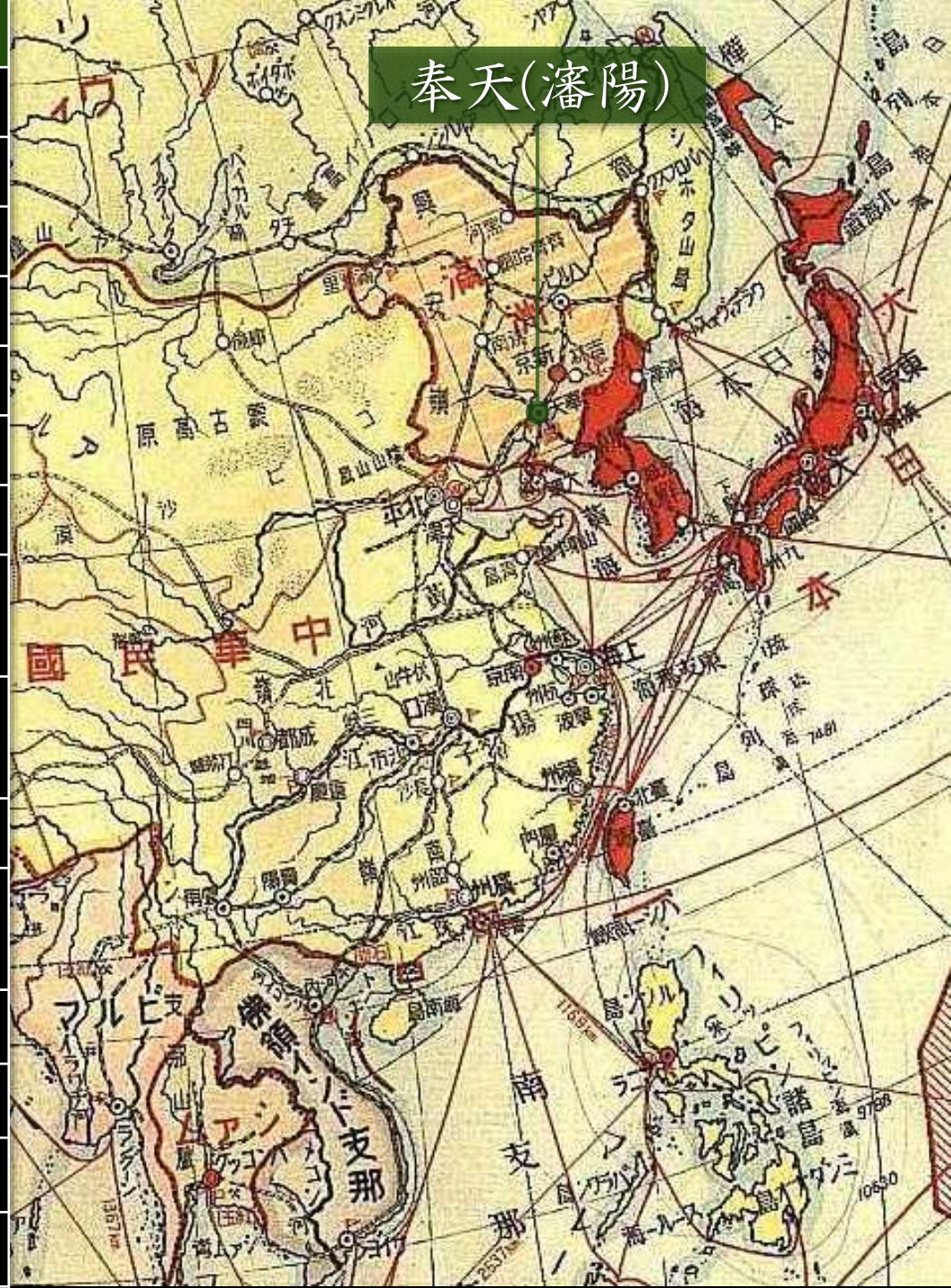
撫順から奉天へ

「この事件がきっかけで私たち一家は、奉天に引越すことになった・・・父は憲兵隊に拘引されて取調べを受けた。通敵、つまり裏切り行為の容疑である。・・・

通敵の容疑は晴れたが、撫順に居づらくなった父は、長年住み慣れた土地を離れ、友人を頼って奉天に居を移すことを決意した」

山口淑子『李香蘭〜私の半生』（新潮社一九八七年、三〇頁）

西暦	年齢	李香蘭(山口淑子)略年譜
1920年	0歳	旧満州(中国東北部)の撫順に生まれる
1931年	11歳	柳条湖事件（九・一八事件）
1932年	12歳	平頂山事件
1933年	13歳	撫順から奉天(瀋陽)に転居



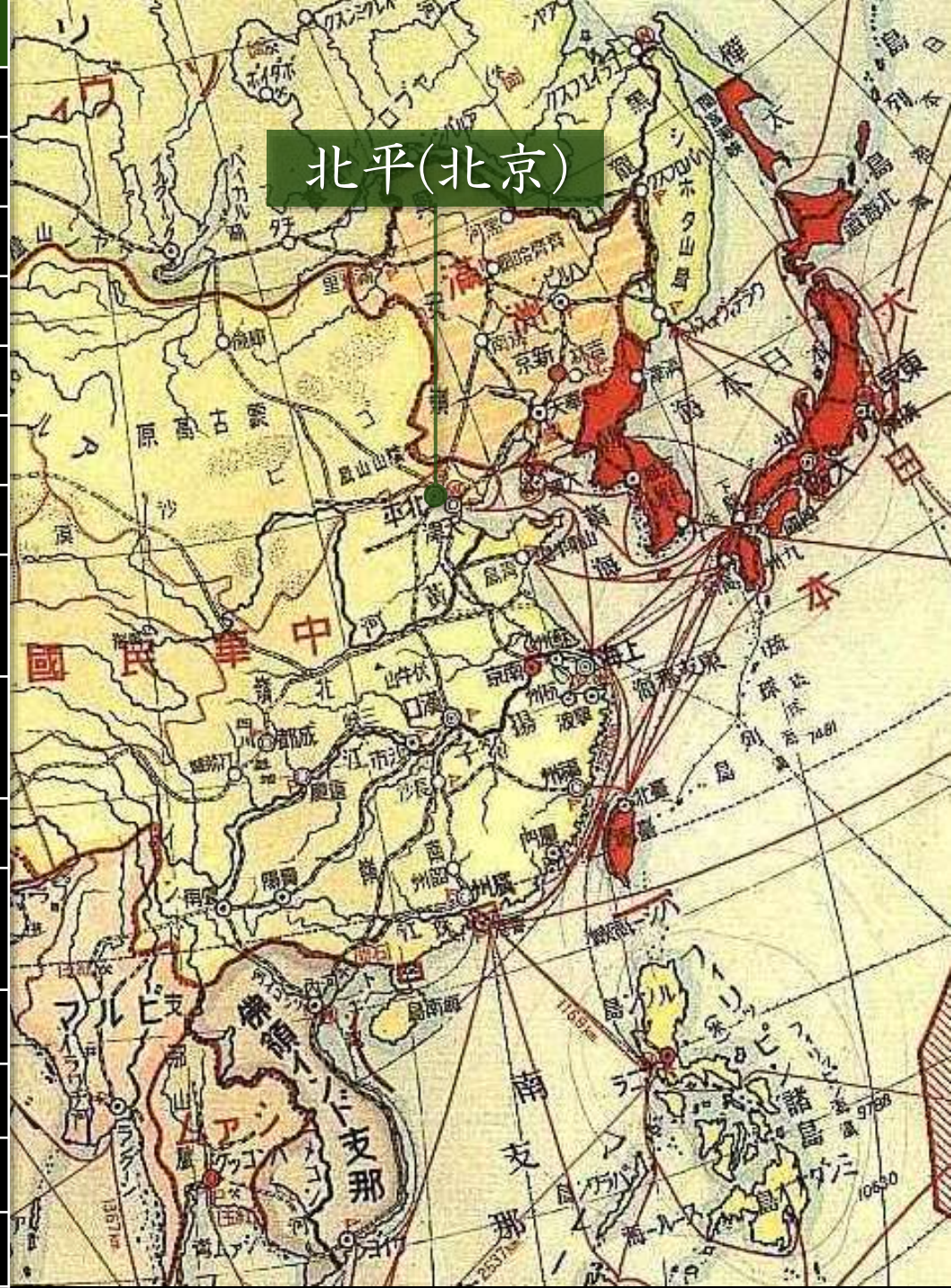
第二章　北京留学時代

北京への留学

〔解説〕

平頂山事件で一家が撫順から奉天（現在の瀋陽）へ転居した後、一九三四年（昭和九年）、十四歳の時、淑子は父の友人・潘毓桂（はんいくけい）を頼って北平（現在の北京）へ行き、潘淑華の名で翊教女子中学に留学した。

西暦	年齢	李香蘭(山口淑子)略年譜
1920年	0歳	旧満州(中国東北部)の撫順に生まれる
1931年	11歳	柳条湖事件（九・一八事件）
1932年	12歳	平頂山事件
1933年	13歳	撫順から奉天(瀋陽)に転居
1934年	14歳	父の友人を頼って北平(北京)の翊教女学校に留学



北京に留学した淑子は、そこで下宿先の潘毓桂の第二夫人から、日本人のある癖を改めるよう注意される。その癖とは？

①中国人の友達を見下したような態度をとること

②人に声をかけられた時、すぐに笑顔を見せること

Q

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

学校生活にも慣れ、劣等感を抱いていた北京語にも自信がついてきたが、風俗習慣まで改めることは不可能であった。

ある日、東娘(潘毓桂の第二夫人)が私を正房によんで忠告してくれたことがある。

「人様に何か言われると、すぐ笑いかえす癖があるが、なぜ笑うのか」

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
(新潮社一九八七年、七四頁)

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

「意味もないのに愛想笑いすることを中国では売笑といって軽蔑されます。」

そういえば、私たち日本人は『男は度胸、女は愛敬』と小さいころから教えこまれ、笑みを浮かべることが女性らしさの表われと思ってきた。しかし、中国では、プライドのない追従と見なされているのだ。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
（新潮社一九八七年、七四頁）

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

東娘はこうも言った。

「日常のあいさつで点頭（軽い会釈）するのはよいけれど、日本人のように深々とお辞儀をするのはよしなさい。卑屈に見えます。」

この忠告は、身にしみてありがたかった。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
（新潮社一九八七年、七四頁）

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

私は、学校で友人に話しかけられても無理に笑わずに返事をするようになり、道で行きあっても、立ちどまって頭を下げることをやめた。友人たちは「都会生活に慣れてきたわね」と言うようになった。

のちに私は欧米で生活するが、アメリカやヨーロッパでも、ことあいさつに関するかぎりは中国と同じである。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
（新潮社一九八七年、七四頁）

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

もっとも、そうした態度は、逆に日本人には、暖かみがなく、傲慢に映ったのだろう。学期末に奉天の実家に帰ると、昔から躾（しつけ）のきびしかった母が「淑子は、大都会に出てから生意気になって礼儀作法がダメになった」と嘆いたものである。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
（新潮社一九八七年、七四頁）

日本人の微笑

〔解説〕

日本人の微笑は、外国人にしばしば違和感や不快感を与えていた。

日本文化を深く理解する小泉八雲(Lafcadio Hearn)は、これを「自らを極限まで抑えた思いやり」＊と呼び、外国人の無理解に異議を唱えた。

＊小泉八雲「日本人の微笑」（『知られぬ日本の面影』第二集所収）。原文は politeness carried to the utmost point of self-abnegation

Lafcadio Hearn

小泉八雲「日本人の微笑」

横浜にいるある婦人から、使用人についての奇妙な話を聞いたのを思いだした。

「先日、私の乳母が何か嬉しいことでもあったように笑いながらこう言うのです。主人が亡くなり葬儀に出るので休みをください、と。私はいいわよ、行きなさいと言いました」

小泉八雲「日本人の微笑」一八九三年五月
（『知られぬ日本の面影』第二集所収）

Lafcadio Hearn

小泉八雲「日本人の微笑」

「……午後になって、彼女が帰って来たとき、骨の入った壷を見せてくれました（中に歯が入っているが見えました）『これが主人です』と。そう言いながら、本当に笑ったのです。こんな嫌なこと、聞いたことありますか？」

小泉八雲「日本人の微笑」一八九三年五月
（『知られぬ日本の面影』第二集所収）

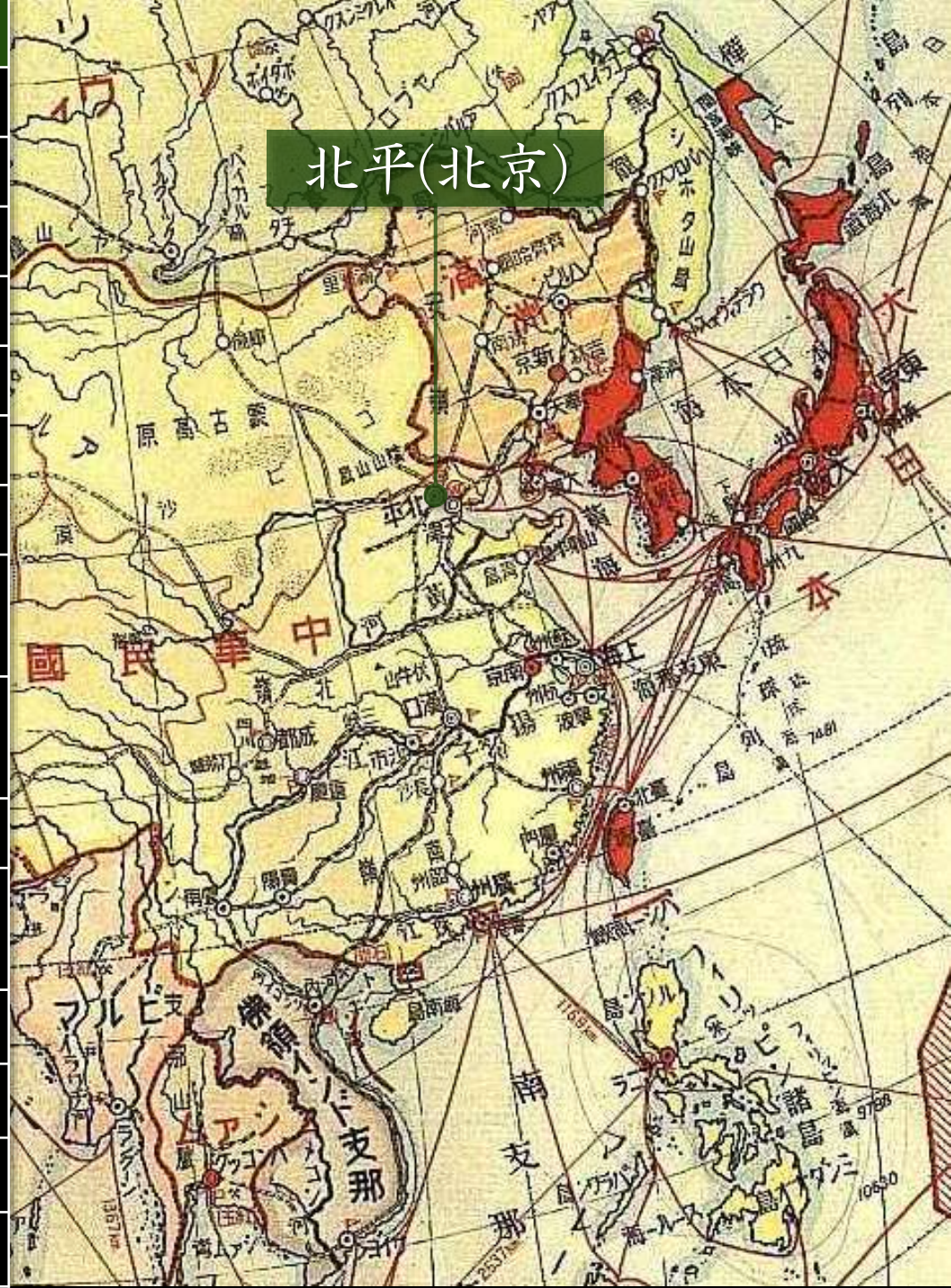
Lafcadio Hearn

小泉八雲「日本人の微笑」

愛していたはずの人が亡くなったばかりなのに、なぜ笑って話すことができるのか。私にもなかなか理解できなかった。しかしその笑いは自らを極限まで抑えた思いやりであった。それはこういう意味なのである。「あなたは不幸な事件とお考えになるでしょうが、どうかそんなつまらないことにお心を悩まさないでください」

小泉八雲「日本人の微笑」一八九三年五月
（『知られぬ日本の面影』第二集所収）

西暦	年齢	李香蘭(山口淑子)略年譜
1920年	0歳	旧満州(中国東北部)の撫順に生まれる
1931年	11歳	柳条湖事件(九・一八事件)
1932年	12歳	平頂山事件
1933年	13歳	撫順から奉天(瀋陽)に転居
1934年	14歳	父の友人を頼って北平(北京)の翊教女学校に留学
1937年	17歳	盧溝橋事件(七・七事変)



山口淑子『李香蘭〜私の半生』

中国人になろうとすれば、日本人らしさを失い、日本人であろうとすれば、中国人から誤解される――この二律背反の悩みは、風俗習慣だけではなく、あらゆる面で終戦時までつきまとうが、もっとも悲しかったのは、祖国・日本と故国・中国との対立が次第に激しくなってくることだった。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
（新潮社一九八七年、七四頁）

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

クラスメートたちの日常会話にも「反日」「排日」「抗日」などの言動がひんぱんに表面化し、地下運動に参加する友人もでてきた。そうした悩みを誰にも打ち明けられないことこそ、最もつらい悩みである。耐えられなくなると、私はよく太廟に出かけて古木の並木を散歩しながら思いきり泣いたものである。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
（新潮社一九八七年、七四頁）

第三節 満映時代

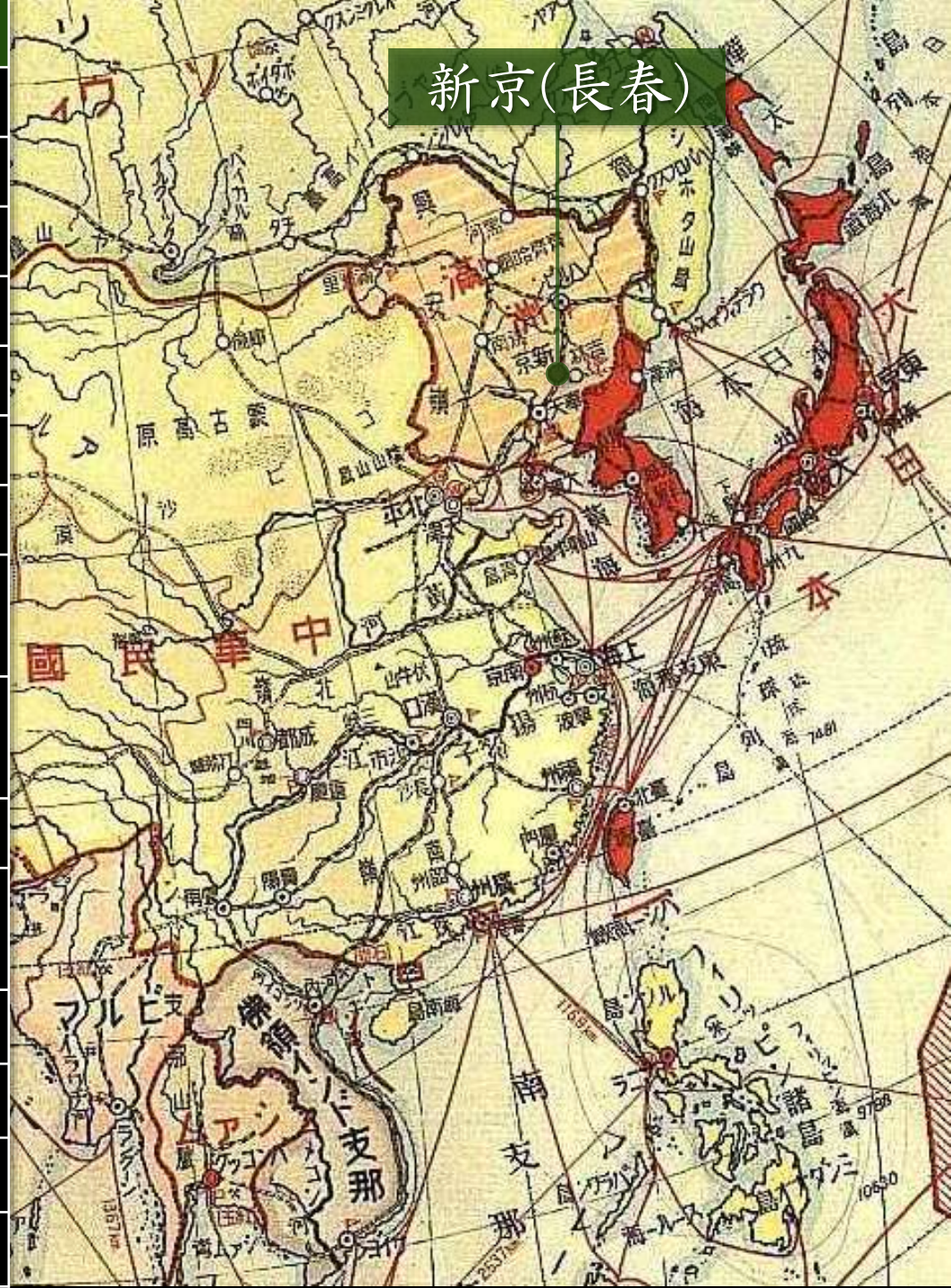
李香蘭の誕生

〔解説〕

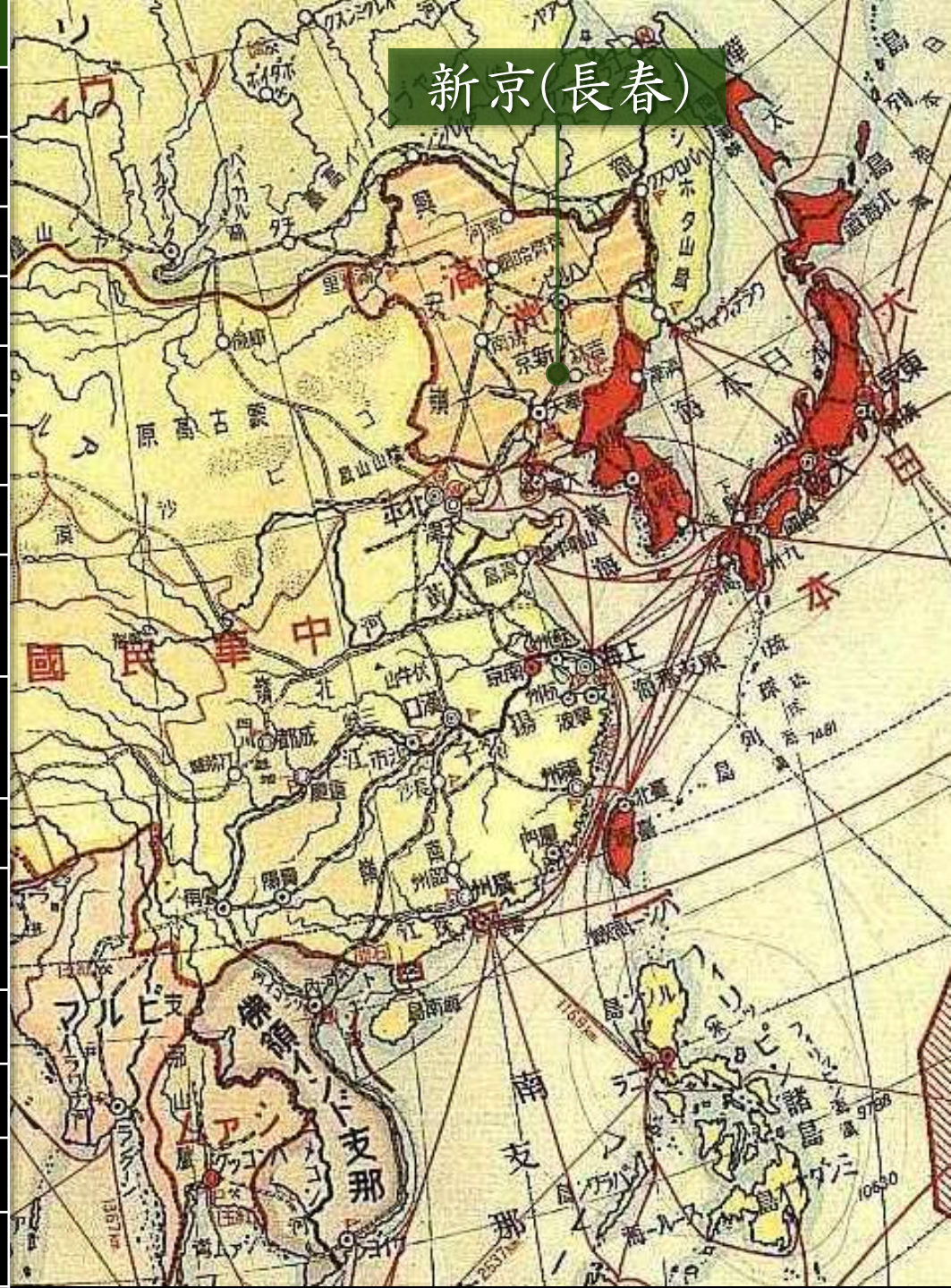
一九三八年(昭和十三年)、十八歳になった山口淑子は、新京(現在の長春)にあった日本の国策映画会社満州映画協会の専属女優となり、李香蘭の芸名でデビューした。

李香蘭　　孟虹

西暦	年齢	李香蘭(山口淑子)略年譜
1920年	0歳	旧満州(中国東北部)の撫順に生まれる
1931年	11歳	柳条湖事件(九・一八事件)
1932年	12歳	平頂山事件
1933年	13歳	撫順から奉天(瀋陽)に転居
1934年	14歳	父の友人を頼って北平(北京)の翊教女子中学に留学
1937年	17歳	盧溝橋事件(七・七事変)
1938年	18歳	新京(長春)に移り、満州映画協会の専属女優となる



西暦	年齢	李香蘭(山口淑子)略年譜
1920年	0歳	旧満州(中国東北部)の撫順に生まれる
1931年	11歳	柳条湖事件(九・一八事件)
1932年	12歳	平頂山事件
1933年	13歳	撫順から奉天(瀋陽)に転居
1934年	14歳	父の友人を頼って北平(北京)の翊教女学校に留学
1937年	17歳	盧溝橋事件(七・七事変)
1938年	18歳	新京(長春)に移り、満州映画協会の専属女優となる
1939年	19歳	満州建国博覧会に参加するため帰国。



Q

李香蘭は、満州建国博覧会に参加するため日本へ行くことが決まったとき、「飛びあがるほどうれしかった」という。それはなぜか？

①久しぶりに日本のごちそうが食べられたから

②日本に行くのは初めてだったから

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

満州建国博覧会に満映代表の日満親善女優使節として私と孟虹が選ばれたときは飛びあがるほどうれしかった。憧れの日本。私は未知の祖国日本を文化と教養の先進国と思いこんでいた。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』（新潮社一九八七年）

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

新京から満鮮国境の町安東(現・丹東)を経て、鴨緑江を渡り、朝鮮半島の釜山へ、さらに関釜連絡船で下関へ入港したのは、出発して四日目だった。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』(新潮社一九八七年)

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

下関へ入港する前夜、それまでの長旅の疲れも忘れた私は、興奮のあまり一睡もできなかった。翌朝、緑にかすむ島影がしだいに大きくなり、生まれてはじめて見る日本が眼の前にあった。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』（新潮社一九八七年）

Q

李香蘭は初めて訪れた日本で意外な体験をする。それはどのような体験か？

①入国の際に警官から服装について叱責された

②初めて訪れた日本で多くのファンにサインを求められた

VIDEO

NHK BSプレミアム 世界・わが心の旅「李香蘭～遥かなる旅路」より

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

水上警察の係官が上船してきて旅券の検閲がはじまった。手際よく進み、まず日本人客が下船し、つぎが外国人の番で、一人一人降りていく。私たち二人は警察官の前に立った。孟虹(写真右)は、パスポートを見せるとすぐ下船を許された。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』(新潮社一九八七年)

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

ついで私がパスポートを見せ、警官がうなずき、行けという身ぶりをしたので通りすぎると、

「おい、ちょっとお前、もどってこい」

と呼びとめられた。

「もう一度パスポートを見せろ」

山口淑子『李香蘭〜私の半生』（新潮社一九八七年）

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

旅券をさしだすと、警官は私の顔と見くらべながら吐きだすようになった。

「貴様！それでも日本人か」

私の旅券には〈山口淑子、芸名・李香蘭〉と記載してあったのである。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』（新潮社一九八七年）

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

「おい、その格好はなんだ、え？」
彼は私の中国服を指さして舌うちした。
「いいか、日本人は一等国民だぞ。それで貴様、恥ずかしくないのか」

山口淑子『李香蘭〜私の半生』（新潮社一九八七年）

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

孟虹は言葉のわからぬまま、その場の異常な雰囲気にオロオロして、不安気に私の顔をのぞきこんだ。私はあまりに恥ずかしくて彼女に事態を説明できなかった。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』（新潮社一九八七年）

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

私が「没什麼(何でもないの)」と小声で言うと、警官は、中国語で言葉をかわしていることにまた腹をたてた。

「この恥っさらしめ。日本帝国臣民なら日本語を使え、日本語を」

山口淑子『李香蘭〜私の半生』(新潮社一九八七年)

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

私には、警官がなぜこんなにいばりちらして中国人であることをいやしめるのかわからず、返す言葉もなく、孟虹の手をひいて船を下りた。

これが夢にまで見ていた日本の第一歩だった。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』（新潮社一九八七年）

『熱砂の誓い』

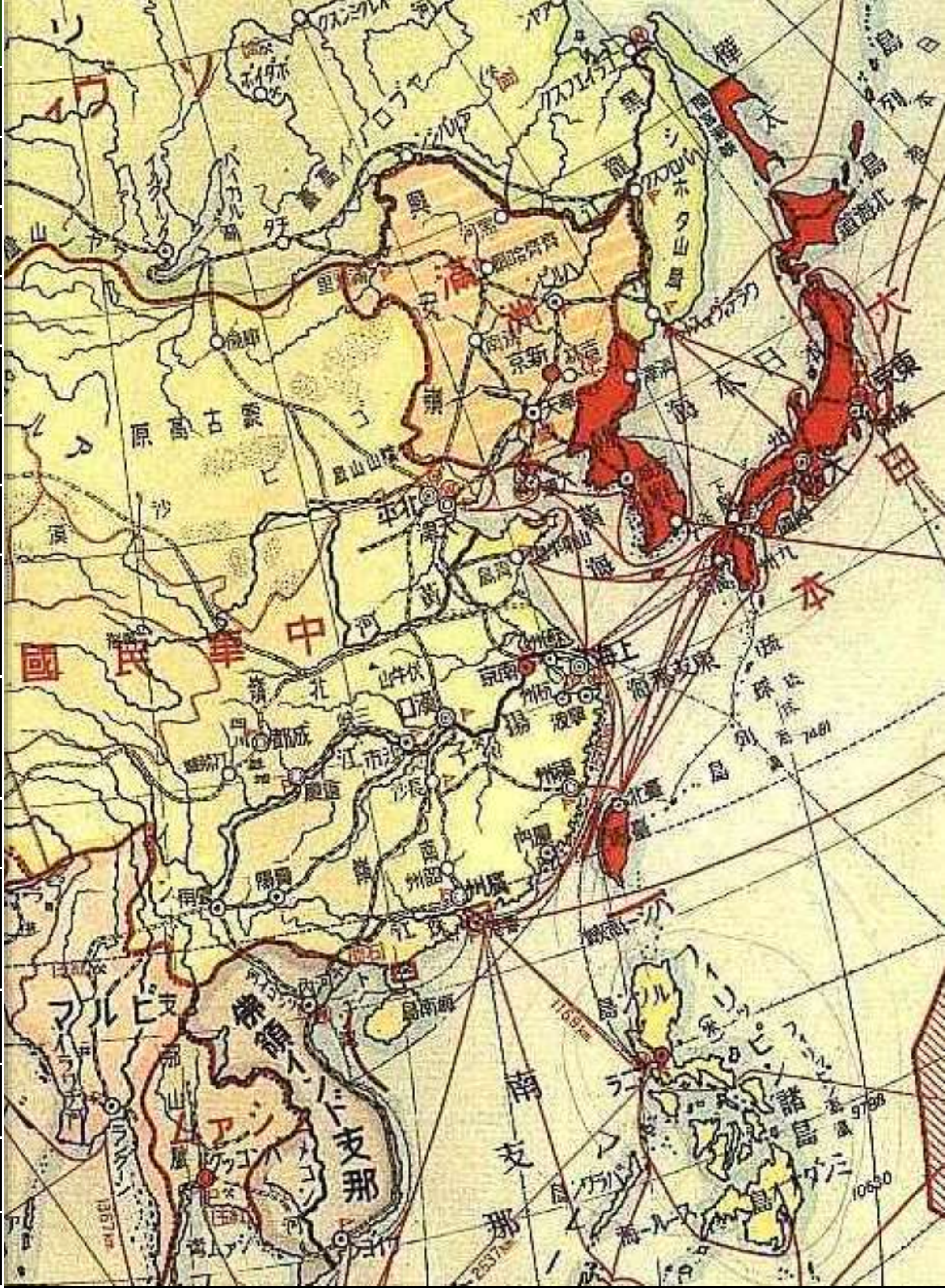
大陸三部作の撮影

〔解説〕

一九三九年(昭和十四年)、十九歳の時、李香蘭は日満親善女優使節として初めて母国日本の土を踏み、当時のトップスター長谷川一夫とともに「大陸親善映画」と呼ばれる、一連の国策映画に出演した。

これらの映画に出演したことで、李香蘭は戦後、漢奸裁判にかけられることになる。

西暦	年齢	李香蘭(山口淑子)略年譜
1920年	0歳	旧満州(中国東北部)の撫順に生まれる
1931年	11歳	柳条湖事件(九・一八事件)
1932年	12歳	平頂山事件
1933年	13歳	撫順から奉天(瀋陽)に転居
1934年	14歳	父の友人を頼って北平(北京)の翊教女学校に留学
1937年	17歳	盧溝橋事件(七・七事変)
1938年	18歳	新京(長春)に移り、満州映画協会の専属女優となる
1939年	19歳	満州建国博覧会に参加するため帰国。大陸三部作「白蘭の歌」「支那の夜」「熱砂の誓い」を撮影



『熱砂の誓い』

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

『白蘭の歌』は大陸進出の夢を甘いロマンスに託したメロドラマで、「大陸親善映画」なる路線のハシリだった。……

『支那の夜』は上海が舞台で、私の役は、長谷川一夫さんの船員に救われる戦争孤児の中国娘。

『熱砂の誓い』は北京が舞台で、日本人土木技師と声楽を勉強するため日本留学中の中国娘との国境を越えた恋……

山口淑子『李香蘭〜私の半生』（新潮社一九八七年）

『熱砂の誓い』

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

長谷川さんとのコンビによるこれら大陸三部作は、いずれも日満青年男女の恋に抗日分子がからみ、波瀾万丈の大活劇の末に二人がめでたく結ばれるという大陸進出を正当化したお定まりのメロドラマだった。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』（新潮社一九八七年）

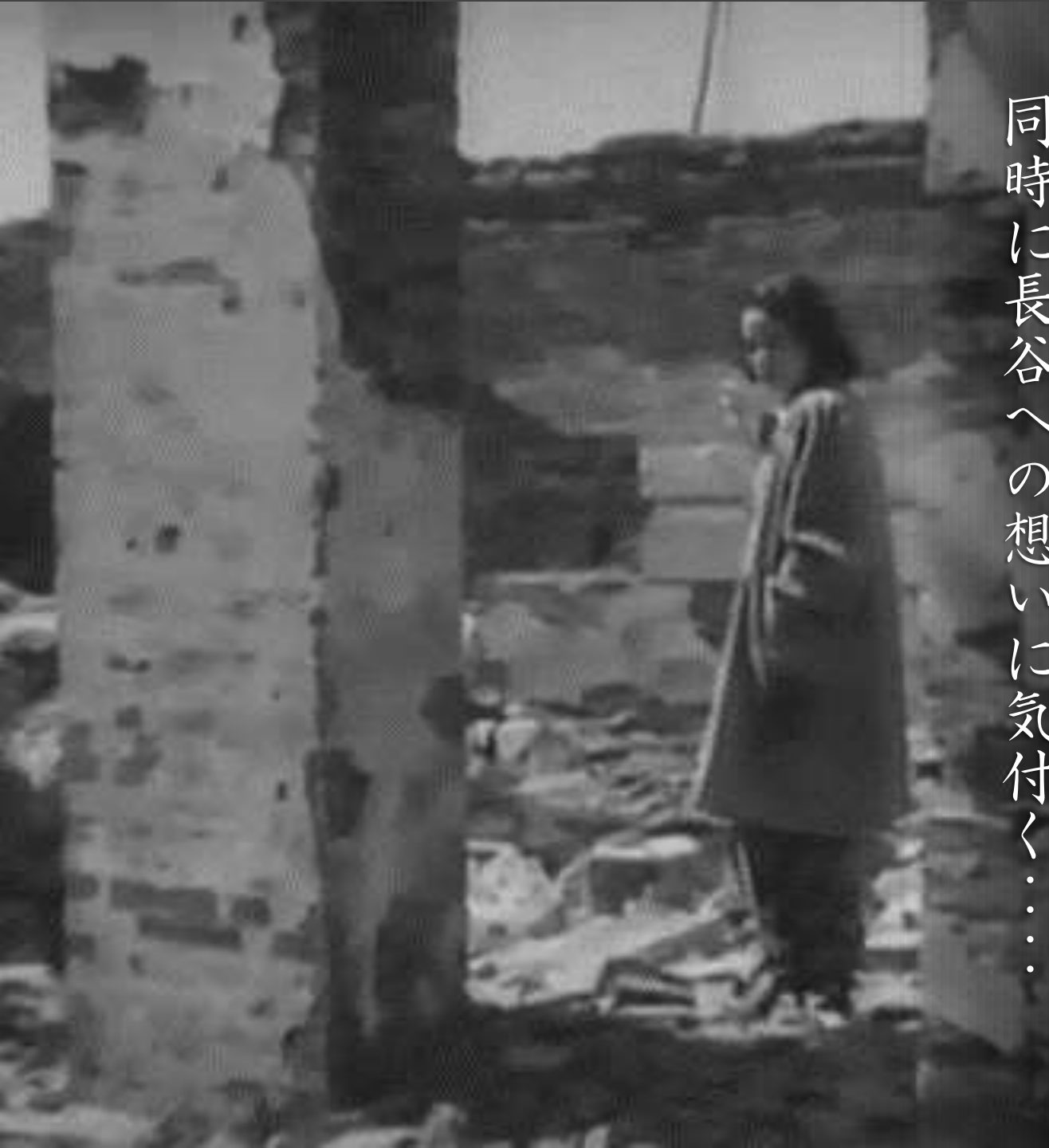
映画「支那の夜」のあらすじ

〔解説〕

船員長谷哲夫と山下仙吉は、上海の酒場で日本人とトラブルを起こしていた中国人の娘・桂蘭を救う。

桂蘭は日本人に恩を受けることを嫌い、働いて借りを返すといって長谷と山下の住むホテルに付いてくる。

風呂で汚れを落とした桂蘭の美しさに長谷は驚くとともに、自らの誠意ある行動によって、桂蘭の日本人に対する憎しみを解こうと決意する。



映画「支那の夜」のあらすじ

桂蘭は実は上海の資産家の娘であった。しかし戦争で家と家族を失ったため、日本人を恨んでいた。

ある日、高熱を出した桂蘭は、長谷やホテルの日本人住人たちから手厚い看護を受ける。ところが病が癒えた桂蘭は、再び粗暴な態度で人々の好意を拒絶する。怒った長谷は、ついに桂蘭の頬を打ってしまう。

桂蘭は、自分の頑ななな心を反省し、同時に長谷への想いに気付く……

『支那の夜』の撮影風景

戦後の漢奸裁判の中で、この映画の一シーンが問題となった。それはどのシーンか？

①日本軍の攻撃で建物のほとんどが倒壊したシーン

②李香蘭扮する中国人少女が平手打ちされるシーン

Q

映画「支那の夜」（1940年（昭和15年）制作）

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

この映画でもっとも忘れられないのは、李香蘭扮する少女・桂蘭が日本人船員・長谷哲夫(長谷川一夫)に殴られるシーンである。他人様から殴られたのははじめてで、本当にびっくりしてしまった。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
(新潮社一九八七年、一三八頁)

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

私はこの四十数年前のシーンを痛さの記憶だけからおぼえているのではない。漢奸裁判で問題になったシーン、日本と中国の習慣のちがいを象徴した例として、いまだに忘れることができないのである。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
（新潮社一九八七年、一三八頁）

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

戦前の日本では、男が女を殴ることも一種の愛情表現で、殴られた女が殴った男の強さや思いやりに感激し、改めて愛に目ざめるという場面は、芝居やスクリーンでよく見うけられた。

しかし、それは日本人だけにつうずる表現だった。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
（新潮社一九八七年、一三八頁）

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

長谷川一夫が山口淑子扮する日本人女性を殴り、そのシーンをみている観客が日本人であれば問題はなかったが、『支那の夜』で日本人男性に殴られたのは、李香蘭扮する中国娘で、それをみて問題にしたのは中国人だった。殴られたのに相手に惚れこんでいくのは、中国人にとっては二重の屈辱と映った。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
（新潮社一九八七年、一三八頁）

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

その行動様式を、侵略者対被侵略者の日中関係におきかえてみた一般の中国人観客は、日本人のように一種の愛情表現とみなして感動するどころか、日本人に対する日ごろの憎悪と反撥がさらに刺激された。

映画の教宣目的は全くの逆効果で、抗日意識をいっそうあおる結果となったのである。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
（新潮社一九八七年、一三八頁）

中國と滿洲と日本とが映画によつて結ばれた！ 打倒英米を誓ふ大東亞國民の映画が、今上海に熱狂的絶賛を捲き起してゐる

萬世流芳

主演　李香蘭・陳雲裳・袁美雲・高占非・王引

總指揮 張善琨・原作 周貽白・脚色臺詞 朱石麟

演出・卜萬蒼・朱石麟・馬徐維邦　近日日本到着

第四章　『萬世流芳』

中華電影・滿洲映画第一回協同作品

『万世流芳』の合作

〔解説〕

日本は中国人向けのプロパガンダ映画を制作するため、満映、華北電影、中華電影の三つの国策会社を設立していた。

一九四二年(昭和十七年)、陸軍は三社を集めて大陸映画聯盟会議を開催した。この会議をつうじて、満映と中華電影の、中国文化工作をめぐる路線の違いが明らかになると、満映は中華電影がプロパガンダ映画を制作しないことを批判した。

中華電影はこうした批判をかわすため、翌四三年(昭和十八年)、満映と合作でアヘン戦争百周年を記念する映画『万世流芳』を制作した。

川喜多長政

中国に設立された日本の国策映画会社

甘粕正彦

Q

李香蘭が所属していた満州映画協会の理事長は、甘粕正彦という元軍人であった。彼にはある前科があったが、その前科とは何か？

①中国人捕虜や一般住民の殺害

②日本人男性・女性・子供の殺害

甘粕正彦（一八九一～一九四五）

〔解説〕

甘粕正彦は、一九一二年（大正元年）、陸軍士官学校卒。

二三年九月、関東大震災の混乱に乗じて無政府主義者の大杉栄と婦人解放運動家の伊藤野枝、大杉の甥で七歳の橘宗一を東京憲兵隊本部に連行して絞殺した。

甘粕は軍法会議で懲役一〇年の判決をうけたが、二六年、仮出所し、軍の機密費でフランスに渡った。

二九年、帰国すると満州に渡り、満州国民政部警務司長、協和会中央本部総務部長などを経て、満州映画協会理事長に就任した。

上海に設立された中華電影の最高責任者は、ヨーロッパ映画の配給会社を経営していた川喜多長政だった。彼は軍部に対し強い不信感を持っていたが、それはなぜか？

①父親が日本軍に殺害されたため

②戦時下に映画など無用だと非難されたため

Q

川喜多長政（一九〇三～一九八一）

〔解説〕

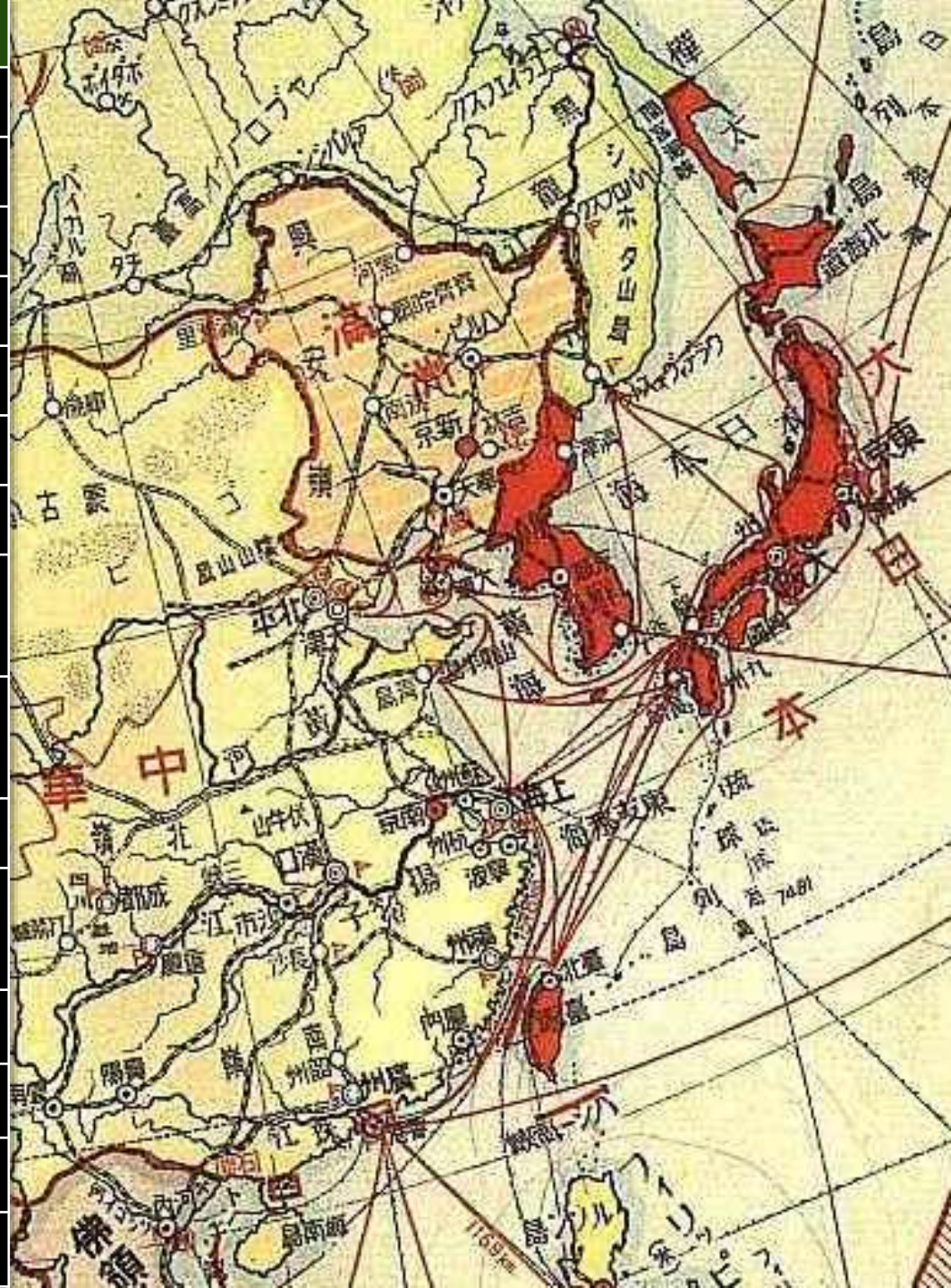
川喜多長政は、陸軍大尉川喜多大治郎の次男として東京で生まれた。

五歳の時、清国の軍官学校に教官として赴任していた父・大治郎が軍機漏洩の疑いで逮捕に向かった日本の憲兵隊に射殺された。

一九二二年、高校卒業後、北京、ドイツに留学。帰国後、映画の輸入配給会社・東和商事を設立。

三九年、中華電影の責任者となり、「中国人の作った映画を、占領地の民衆に見せること、そして日本の映画にも親しむようにし、映画を通じて日中友好をとげること」を目標に軍部からの圧力に抵抗し、中国側スタッフに自由な映画制作を行わせた。

西暦	年齢	李香蘭(山口淑子)略年譜
1920年	0歳	旧満州(中国東北部)の撫順に生まれる
1931年	11歳	柳条湖事件(九・一八事件)
1932年	12歳	平頂山事件
1933年	13歳	撫順から奉天(瀋陽)に転居
1934年	14歳	父の友人を頼って北平(北京)の翊教女学校に留学
1937年	17歳	盧溝橋事件(七・七事変)
1938年	18歳	新京(長春)に移り、満州映画協会の専属女優となる
1939年	19歳	満州建国博覧会に参加するため帰国。大陸三部作「白蘭の歌」「支那の夜」「熱砂の誓い」を撮影
1943年	23歳	アヘン戦争100周年を記念して満映と中華電影が合作した映画『万世流芳』に出演



山口淑子『李香蘭〜私の半生』

この映画のミソは……日本人から見れば、阿片戦争で中国の植民地化をねらうアングロサクソンに抵抗する内容なので、鬼畜米英につながる戦意高揚映画。一方、中国人からみれば、外敵(日本)の侵略と戦うレジスタンス映画。

つまり、みる人のイデオロギーによって解釈自在の玉虫色のストーリーだった。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
(新潮社一九八七年、二六四頁)

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

「中国よ、立ち上がろう！」がテーマの『萬世流芳』は、一九四三年六月に封切られると大変なヒットとなった。観客動員数は中国映画はじまって以来とのことだった。・・・・

日本軍占領区であると否とを問わず上映された。川喜多さんは「延安にも重慶にもフィルムが行っているよ」と満足げだった。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
（新潮社一九八七年、二六八〜九頁）

満州映画協会との契約を解除

〔解説〕

李香蘭は、『万世流芳』に出演した後の記者会見で、中国人の記者からある質問を受ける。その質問をきっかけとして、李香蘭は満映との契約解除を決意した。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

北京飯店の会見場に集まった記者は五十人近かった。記者会見は、李氏の司会でなごやかに進んだ。

「では、そろそろ」と李氏が終わりを告げようとしたとき……若い記者が立ちあがり、「最後にひとつだけ聞きたいことがあります。」

山口淑子『李香蘭〜私の半生』（新潮社一九八七年）

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

「あなたがこれまでに『白蘭の歌』や『支那の夜』など一連の日本映画に出演された真意をうかがいたい。あれらの映画は、中国を理解していないどころか、侮辱しているとさえ思われます。あなたは中国人でしょう？それなのに、なぜ、あのような映画に出演したのですか」

山口淑子『李香蘭〜私の半生』（新潮社一九八七年）

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

一九四四年秋、甘粕理事長に面会を求めた。……なかなか言いだせなかったが、思いきって口を開いた。

「長いあいだ、ありがとうございました」

山口淑子『李香蘭〜私の半生』（新潮社一九八七年）

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

「私は、中国人になりすましていることが、もうできなくなりました。これまでに、日本と中国との板ばさみになって、ずいぶん苦しみました。これ以上李香蘭としての生活には、耐えることができないのです。契約を解除していただきたいと思います。」

山口淑子『李香蘭〜私の半生』（新潮社一九八七年）

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

「よくわかりました」

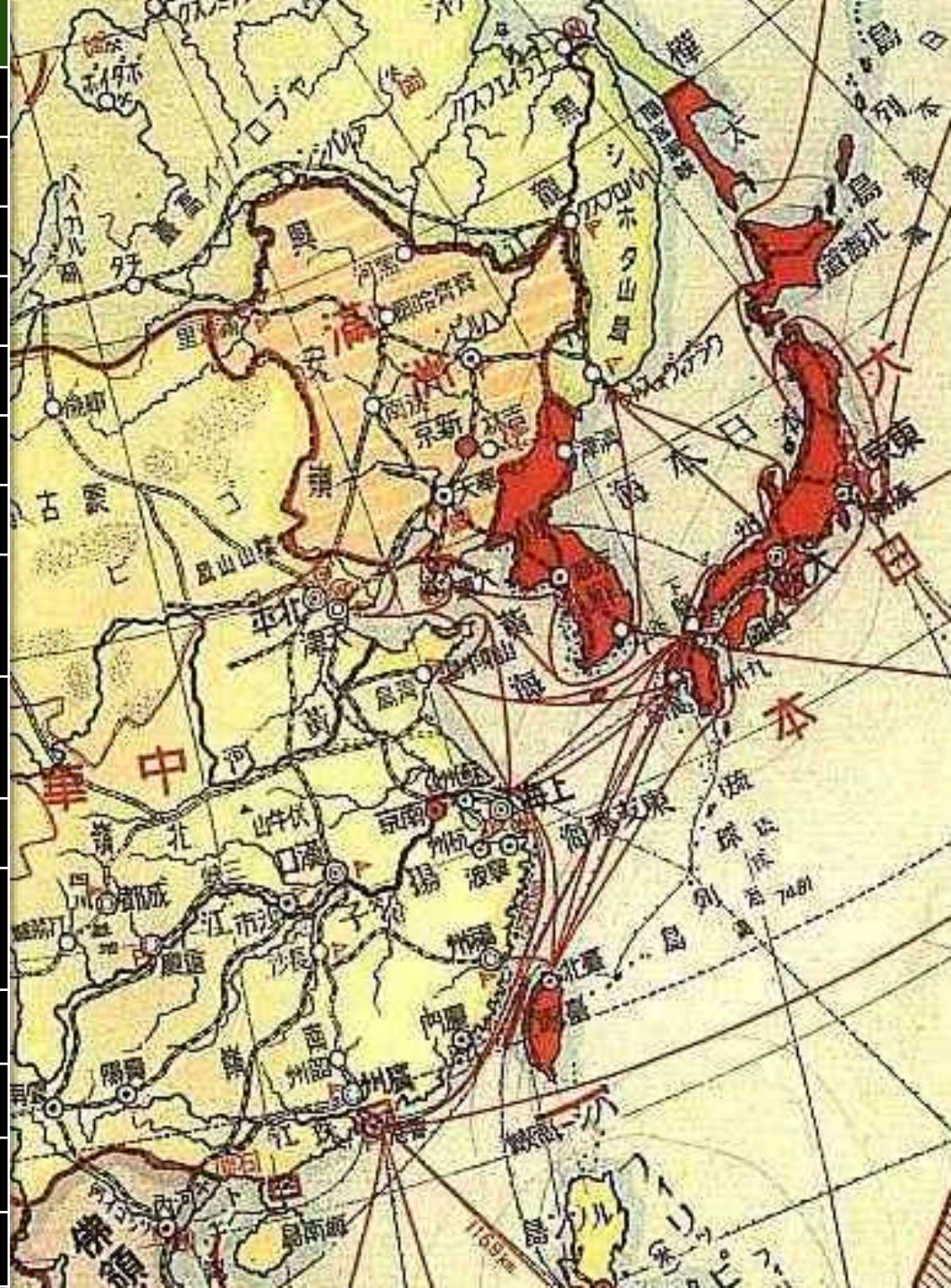
顔を上げると、甘粕さんはあの丸縁の眼鏡の中から、例の照れたような表情で少し笑って、それから少し頭をかいた。

「あなたが李香蘭でいることの不自然さはわたしにもわかっていた。満州国や満映はどうなるかわからないが、あなたの将来は長い。どうか自分の思う道をすすんでいってください」

山口淑子『李香蘭〜私の半生』（新潮社一九八七年）

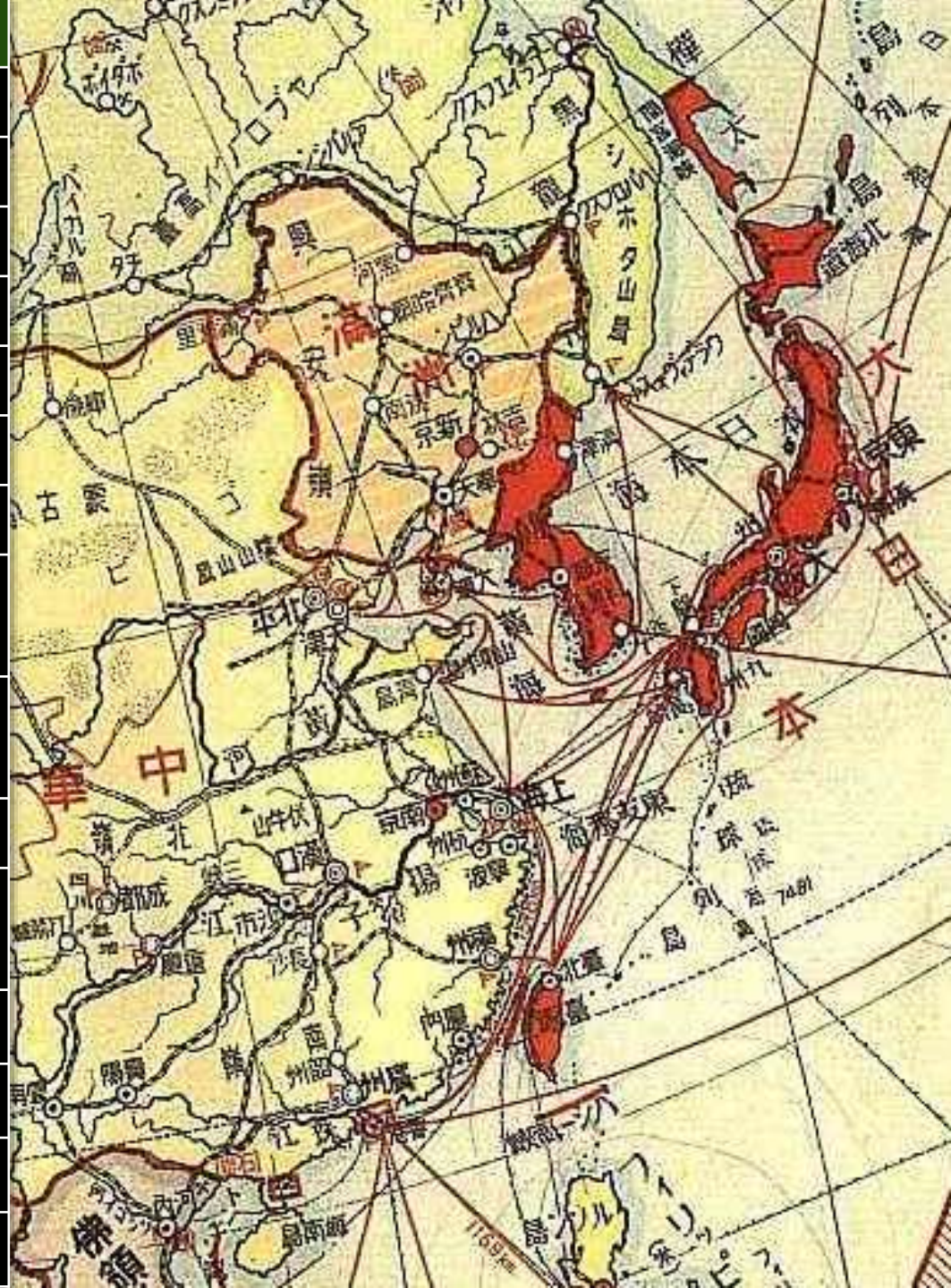
甘粕正彦(1891〜1945)

西暦	年齢	李香蘭(山口淑子)略年譜
1920年	0歳	旧満州(中国東北部)の撫順に生まれる
1931年	11歳	柳条湖事件(九・一八事件)
1932年	12歳	平頂山事件
1933年	13歳	撫順から奉天(瀋陽)に転居
1934年	14歳	父の友人を頼って北平(北京)の翊教女学校に留学
1937年	17歳	盧溝橋事件(七・七事変)
1938年	18歳	新京(長春)に移り、満州映画協会の専属女優となる
1939年	19歳	満州建国博覧会に参加するため帰国。大陸三部作「白蘭の歌」「支那の夜」「熱砂の誓い」を撮影
1943年	23歳	アヘン戦争100周年を記念して満映、中華電影、中華聯合製片公司が合作した映画『万世流芳』に出演
1944年	24歳	満州映画協会との契約を解除し、上海に移る



第五章　上海時代

西暦	年齢	李香蘭(山口淑子)略年譜
1920年	0歳	旧満州(中国東北部)の撫順に生まれる
1931年	11歳	柳条湖事件(九・一八事件)
1932年	12歳	平頂山事件
1933年	13歳	撫順から奉天(瀋陽)に転居
1934年	14歳	父の友人を頼って北平(北京)の翊教女学校に留学
1937年	17歳	盧溝橋事件(七・七事変)
1938年	18歳	新京(長春)に移り、満州映画協会の専属女優となる
1939年	19歳	満州建国博覧会に参加するため帰国。大陸三部作「白蘭の歌」「支那の夜」「熱砂の誓い」を撮影
1943年	23歳	アヘン戦争100周年を記念して満映、中華電影、中華聯合製片公司が合作した映画『万世流芳』に出演
1944年	24歳	満州映画協会との契約を解除し、上海に移る
1945年	25歳	上海陸軍報道部の班員であった服部良一の企画により「夜来香ラプソディー」を開催



服部良一(1907～93)

服部良一(一九〇七～九三)

〔解説〕

服部良一は昭和を代表するポピュラー作曲家。亡命ウクライナ人・エマヌエル・メッテルから楽理を学び、一九三六年、コロンビアの専属作曲家となる。

四四年、中支派遣軍報道部嘱託奏任官佐官待遇として上海に渡り、音楽による宣伝工作を行う中、上海交響楽団を指揮して「夜来香幻想曲」を発表した。

当時の思い出を服部は次のように語っている。

服部良一(1907～93)

『上海ブギウギ―服部良一の冒険』

「国際都市上海の日常生活が日本軍によって平和的に維持されていることを国際的にアピールしたいという思惑があった軍部は、日本から山田耕作、近衛秀麿など音楽界の重鎮、巨匠を招いてその任務に当たらせました。」

上田賢一著『上海ブギウギ――服部良一の冒険』（音楽の友社、二〇〇三年）

服部良一(1907～93)

『上海ブギウギ―服部良一の冒険』

「しかし、彼らは軍部の顔色ばかりを気にして、軍部から命じられるままに、軍国歌謡の『愛国行進曲』や『海ゆかば』などを主なレパートリーにした音楽会を開いては上海市民の反発を買っていました。

それで、あわてた軍部は、『上海はジャズの都である、日本から誰かジャズに強い人物を呼べ』といってぼくを上海に呼んだのです。」

上田賢一著『上海ブギウギ――服部良一の冒険』（音楽の友社、二〇〇三年）

「夜来香幻想曲」

〔解説〕

「夜来香幻想曲」のリサイタルは一九四五年五月、上海静安寺路にある大光明大戯院で開催された。

大光明大戯院は上海一の豪華な劇場で、座席の数は二千で、全部が指定席。

（リサイタルは）三日間、昼夜二回にわたり開催された・・・・。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
（新潮社一九八七年、二八八頁より）

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

日本の敗色が濃くなってきた時期だった。川喜多さんも中川中尉も、李香蘭が日本人であると知ったら中国人は聞きにこないだろうとハラハラしていた。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
（新潮社一九八七年、二八八頁より）

ドラマ「李香蘭」(テレビ東京・角川映画 2007年)より

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

蓋をあけてみると、連日満員、新聞の批評も好評だった。切符は売りきれて三倍のプレミアムがついた。

劇場側からは引きつづき一週間の続演を要望されたが、私はノドがつぶれるおそれがあったのでことわった。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
（新潮社一九八七年、二八八頁）

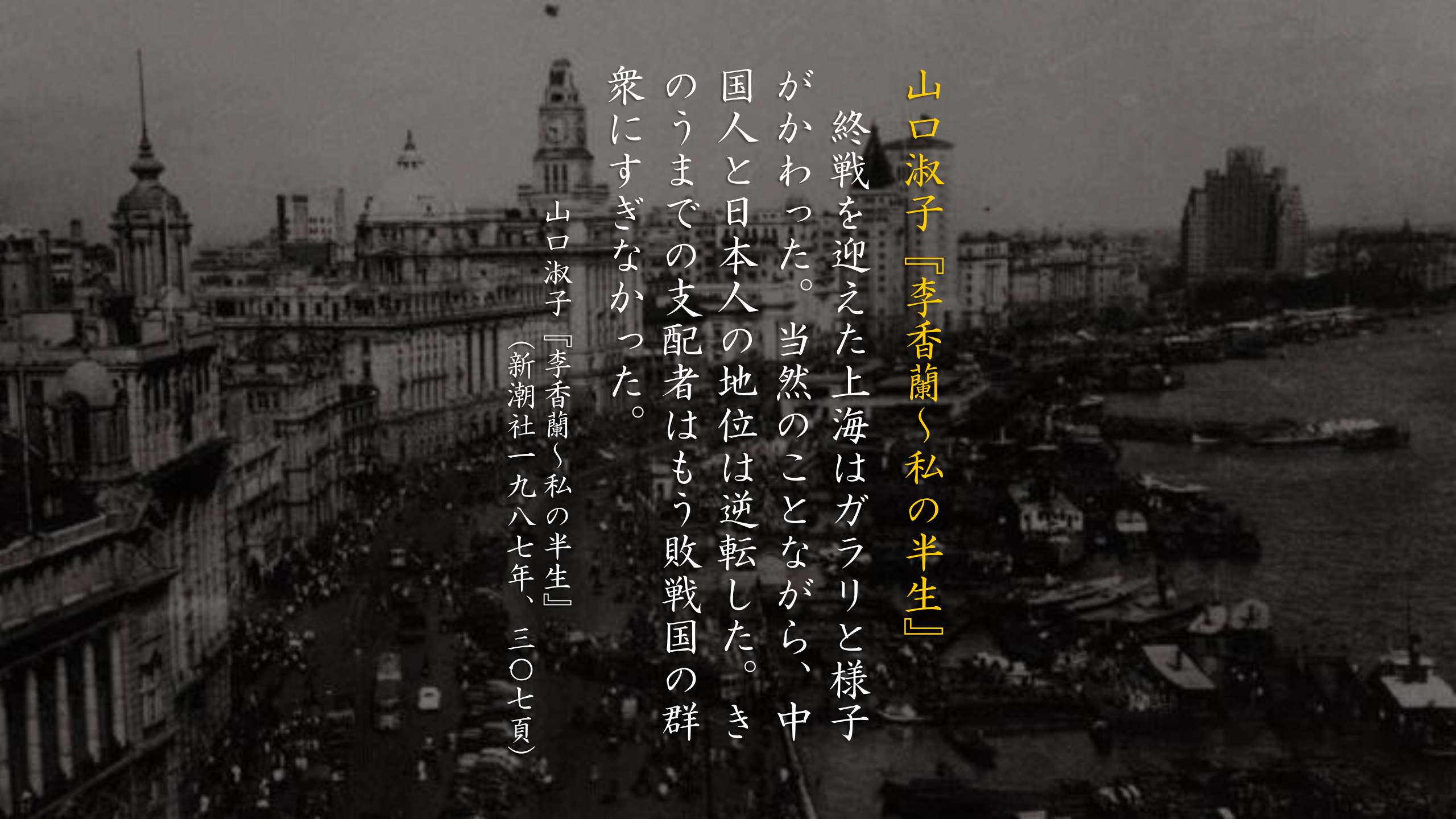
山口淑子『李香蘭〜私の半生』

報道部の調べによると、聴衆の九十パーセントまでが中国人と租界に住む外国人だった。

服部さんは「音楽に国境はない、ということが実感してわかった。音符は世界共通の言葉だ」としみじみ語ったものである。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
（新潮社一九八七年、二八八頁）

第六節　敗戦と漢奸裁判



山口淑子『李香蘭〜私の半生』

終戦を迎えた上海はガラリと様子がかわった。当然のことながら、中国人と日本人の地位は逆転した。きのうまでの支配者はもう敗戦国の群衆にすぎなかった。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』（新潮社一九八七年、三〇七頁）

服部良一(1907～93)

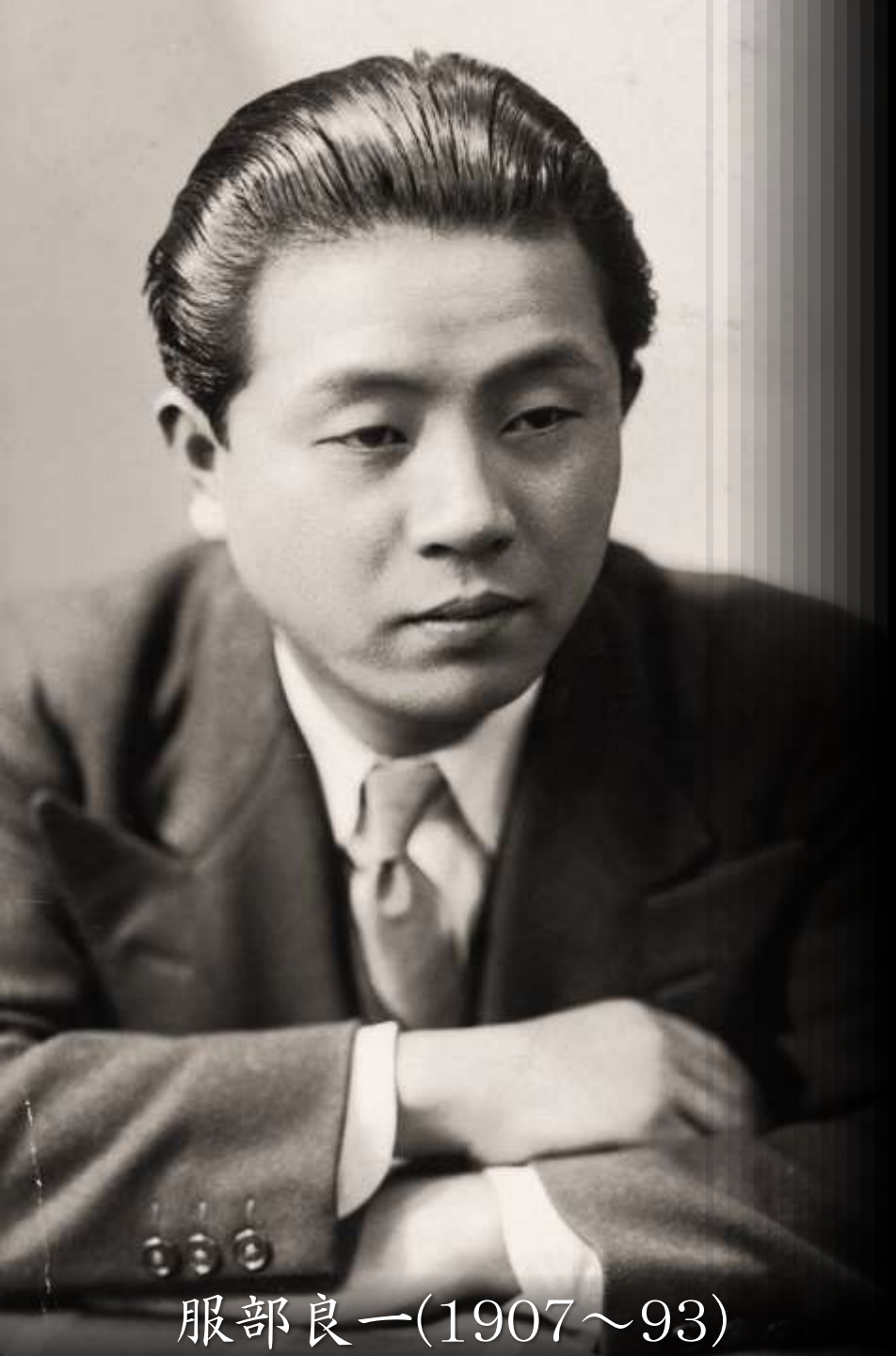
終戦後の日中の文化人たち

〔解説〕

では、日本の占領下で交流を重ねた日中の文化人の関係は、どうなったのであろうか。

服部良一は後年、次のようなエピソードを語っている。

陳歌辛(1914～61)



服部良一(1907～93)

『上海ブギウギ―服部良一の冒険』

八月一五日、終戦の日を服部さんたちはそれぞれに迎えた。……自室に帰ると電話のベルが鳴った。陳歌辛からだった。

「コングラチュレーション、ミスター・ハットリ」

「何がコングラチュレーションだ。ぼくの国は負けたんだ」

上田賢一著『上海ブギウギ――服部良一の冒険』（音楽の友社、二〇〇三年）

陳歌辛（一九一四～六一）

〔解説〕

陳歌辛は一九三〇年代から四〇年代にかけて、上海で活躍したポピュラー作曲家。「玫瑰 玫瑰 我愛你」、「花様年華」など、数多くのヒット曲を飛ばした。

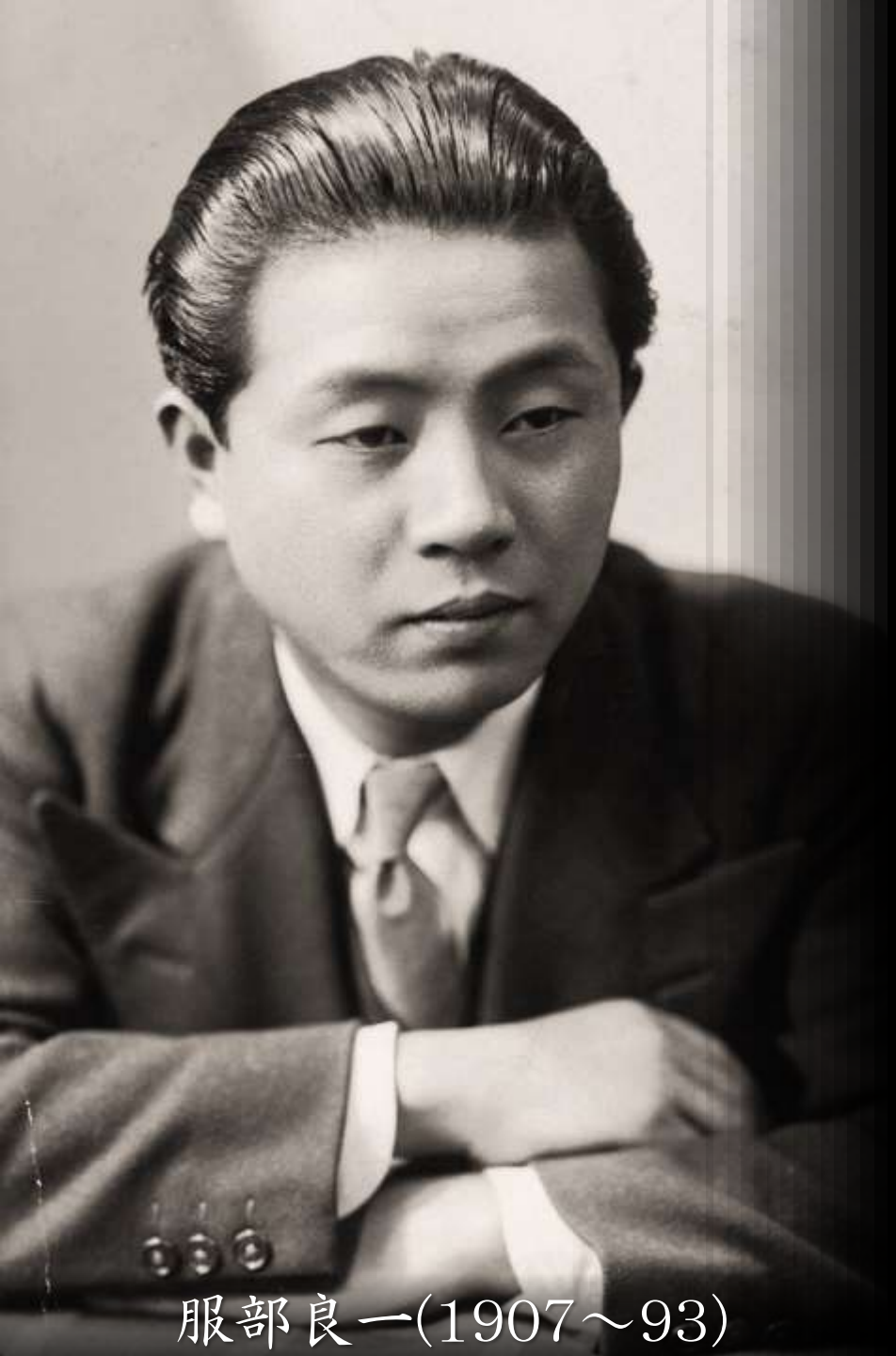
戦時中は、日本占領下の上海で服部良一とも親交があった。

『上海ブギウギ―服部良一の冒険』

「ノー。戦争をしていたのは我々の国で、我々音楽家同士が戦争をしていたわけではない。戦争が終わって、これであなたと私は軍を気にせず堂々と付き合えるようになったのです……今晩、酒を持って行きますから、待っていて下さい」

上田賢一著『上海ブギウギ――服部良一の冒険』（音楽の友社、二〇〇三年）

陳歌辛(1914～61)

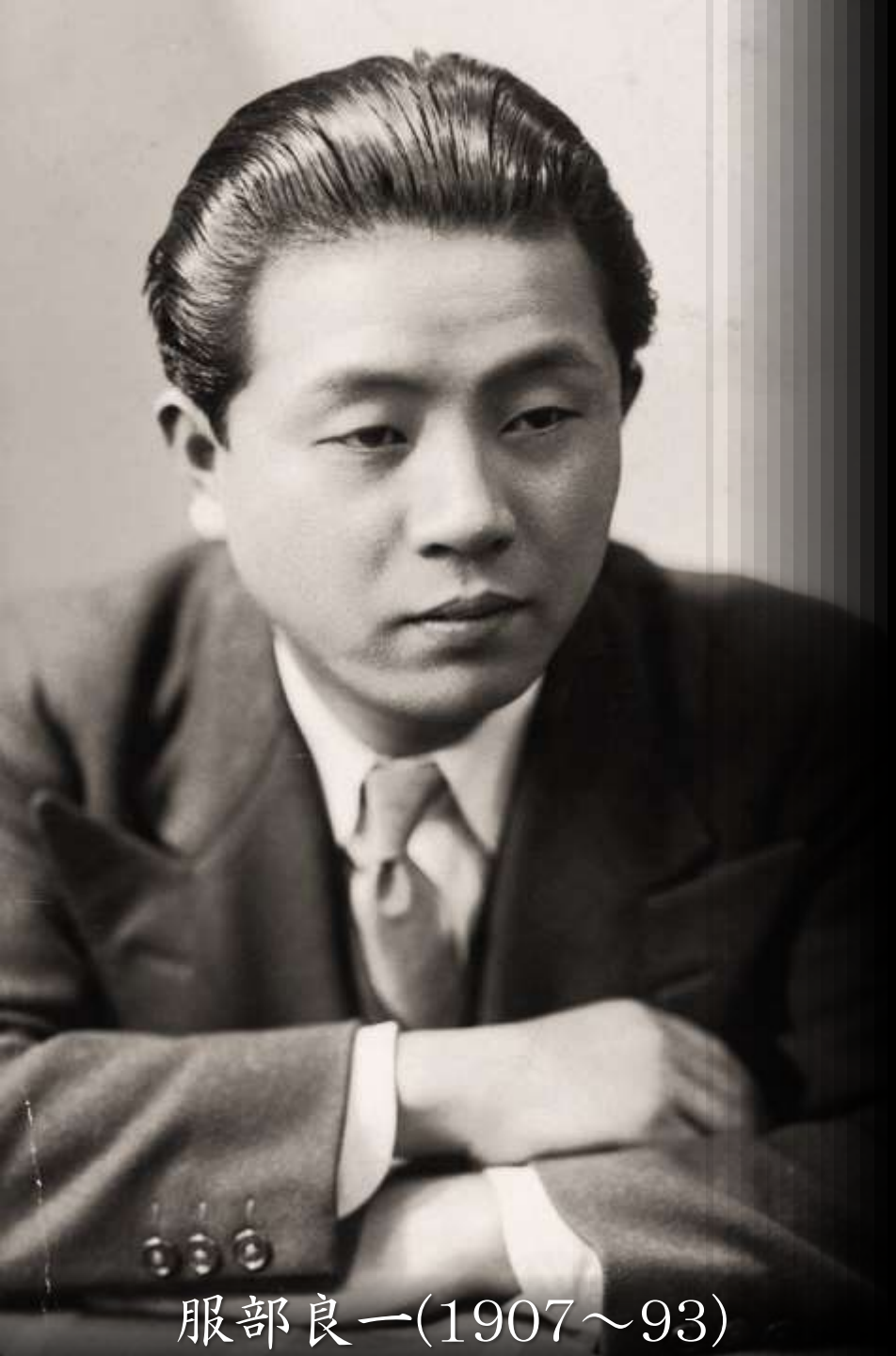


服部良一(1907～93)

『上海ブギウギ―服部良一の冒険』

上海に来て以来、彼らと親しく付き合ってきたが、「自分は敵味方関係なく付き合っているつもりだが、彼らはもしかして日本が上海の支配者であるから自分に対して友情を示しているのではないだろうか」と心のどこかで疑っていたことは否定出来なかった。

上田賢一著『上海ブギウギ――服部良一の冒険』（音楽の友社、二〇〇三年）



服部良一(1907～93)

『上海ブギウギ―服部良一の冒険』

しかし、この時、死を覚悟して自分のところにやって来てくれる彼らの真の友情に……自分の抱いた疑念を恥じた。

彼らは以前とまったく変わらない態度で……接し、何度もやって来ては悠々と帰っていった。

上田賢一著『上海ブギウギ――服部良一の冒険』（音楽の友社、二〇〇三年）

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

（終戦後、）国民政府は汪兆銘政府の陳公博首相以下、要人の身柄引き渡しを要求するとともに、漢奸裁判の基本方針を明らかにした。

李香蘭の名は壁新聞に日本関係女性漢奸として、川島芳子、東京ローズとともに、筆頭に掲げられていた。

「中国人でありながら中国を冒涜する映画に出演することによって日本の大陸政策に協力し中国を裏切った」――それが私の罪状だった。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』（新潮社一九八七年、三〇七頁）

川島芳子（一九〇七～四八）

〔解説〕

清朝の皇族・粛親王の第十四王女、本名は愛新覺羅顯玗。粛親王の顧問だった川島浪速の養女となり日本で教育を受けた。

清朝復興のため、日本軍の工作員として諜報活動に従事した容疑で、戦後、漢奸裁判にかけられた。

漢奸罪に問われていた李香蘭は、
あるものによって無罪を立証しようとした。そのあるものとは何か？

①日本の戸籍謄本

②川喜多長政や服部良一らの証言

VIDEO

NHK BSプレミアム 世界・わが心の旅「李香蘭～遥かなる旅路」より

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

いつも玄関の脇に見張り番で立っている若い兵士がある日「使いの人が持ってきた」と、小さな長方形の木箱を差しだした。いったんほどいて中を点検したとみえ、新聞紙とハトロン紙と細ひもが添えてあった。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
（新潮社一九八七年、三三〇頁）

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

このころには、若い兵士は、私たちにすっかり打ちとけていた。彼は大学生で、在学中に入隊し参戦したが、「戦争はもう終わったのだから早く教室に帰りたい」などと語ることがあった。。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
（新潮社一九八七年、三三〇頁）

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

彼がとりついだ木箱の蓋を開けたとたん、私は思わず声をあげた。木箱の中身は古びた小さな日本人形・藤娘だった。

これは幼いころ母が日本から私のために買いもとめてくれたもので、撫順、奉天、北京と、どこへ引越しても私の部屋のタンスの上に飾っておいた懐かしい人形である。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
（新潮社一九八七年、三三〇頁）

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

「北京にいる母が届けてくれたのだわ。私の大好きな人形なのよ」と説明すると、兵士は「よかったですね」とそれ以上あらためずに引き退っていった。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
（新潮社一九八七年、三三〇頁）

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

川喜多さんたちと中をあらためてみたが、手紙らしいものは入っていない。……しげしげと見つめると帯の一部にどことなく不自然なほころびの跡があった。

帯を解いていくと、その布地の内側に、薄い紙切れが、細長くただんで縫いこまれてあった。震える手で広げていくと、それはしみのにじんだ半紙、山口家の戸籍謄本だった。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
（新潮社一九八七年、三三〇頁）

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

二月中旬、私は軍事裁判所の法廷に召喚された。これまでに取調べは何度か受けたけれど、裁判官の居ならぶ法廷の被告席にすわるのははじめてだった。法廷は軍政部の一室で、私たちの前の小高い机には十人ぐらいの軍服姿や私服姿の係官が横にならんでいた。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
（新潮社一九八七年、三三三頁）

山口淑子『李香蘭〜私の半生』

書記官が、これまでの取調べについて説明し、戸籍謄本とその信憑性に関して報告した。これを受けて裁判長が、「これで漢奸の容疑は晴れた。無罪」と宣言して、小さな木槌をトンと打った。それから「ただし全然、問題がなかったわけではない」とつけ加えた。

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
（新潮社一九八七年、三三三頁）

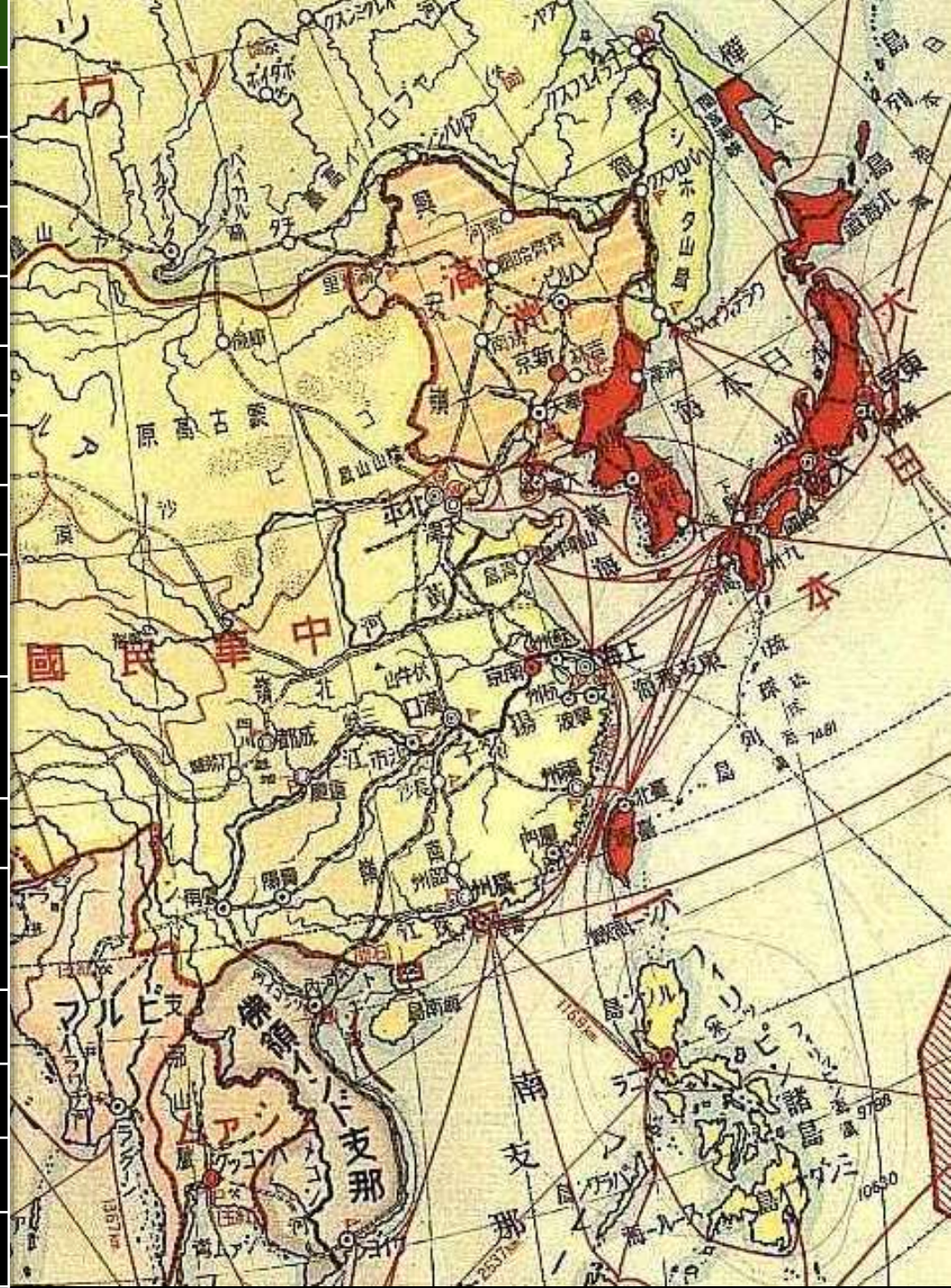
山口淑子『李香蘭〜私の半生』

「この裁判の目的は、中国人でありながら中国を裏切った漢奸罪を裁くことにあるのだから、日本国籍を完全に立証したあなたは無罪だ。しかし、一つだけ倫理上、道義上の問題が残っている。それは、中国人の芸名で『支那の夜』など一連の映画に出演したことだ。法律上、漢奸裁判には関係ないが、遺憾なことだと本法廷は考える。」

山口淑子『李香蘭〜私の半生』
（新潮社一九八七年、三三三頁）

VIDEO

西暦	年齢	李香蘭(山口淑子)略年譜
1920年	0歳	旧満州(中国東北部)の撫順に生まれる
1931年	11歳	柳条湖事件（九・一八事件）
1932年	12歳	平頂山事件
1933年	13歳	撫順から奉天に転居。
1934年	14歳	父の友人を頼って北京の翊教女学校に留学
1937年	17歳	盧溝橋事件(七・七事変)
1938年	18歳	新京に移り、満州映画協会の専属女優となる
1939年	19歳	満州建国博覧会に参加するため帰国し、大陸三部作「白蘭の歌」「支那の夜」「熱砂の誓い」を撮影
1943年	23歳	アヘン戦争100周年を記念して満映、中華電影が合作した映画『万世流芳』に出演
1944年	24歳	満州映画協会との契約を解除し、上海に移る
1945年	25歳	上海陸軍報道部の班員であった服部良一の企画により「夜来香ラプソディー」を開催
1946年	26歳	漢奸の容疑で軍事裁判を受けるが、無罪となり帰国
1974年	54歳	自民党公認で参議院議員選挙に出馬し当選(～92年)
1993年	73歳	勲二等宝冠章を授与される
2014年	94歳	没



終戦と漢奸裁判

李香蘭と川喜多長政、服部良一らはその後、無事日本に帰国した。

一方、川島芳子と甘粕正彦、陳歌辛らは――

川島芳子（1907～48）

川島芳子（一九〇七～四八）

〔解説〕

川島浪速の養女となっていた芳子（愛新覺羅顯玗）は、李香蘭と同じく日本の戸籍によって無罪を証明しようとした。

しかし、浪速は芳子を日本の戸籍に入れていなかったため、漢奸裁判で有罪となり、銃殺刑に処せられた。

甘粕正彦（一八九一～一九四五）

〔解説〕

李香蘭が満映を去ってから九ヵ月後の一九四五年八月二十日、ソ連軍が新京に進入した。

甘粕正彦は理事長室で青酸カリをあおいで自殺した。その場にいた内田吐夢監督が口に塩を含ませ、足を上にして、吐かせようとしたが、無駄だった。

甘粕正彦(1891～1945)

陳歌辛(1914～61)

陳歌辛（一九一四～六一）

〔解説〕

陳歌辛は中華人民共和国建国後の一九五七年に起こった反右派闘争で、右派のレッテルを貼られ、労働改造のため安徽省白茅嶺農場に送られた。一九六一年、農場での栄養不良のため、四五歳でこの世を去った。

参考文献

- 山口淑子『李香蘭〜私の半生』（新潮社 一九八七年）
- 辻久一『中華電影史話』（凱風社 一九九八年）
- 上田賢一『上海ブギウギ一九四五—服部良一の冒険』（音楽之友社 二〇〇三年）